

茨城県行方郡麻生町

# 十三仏遺跡

第1次調査報告書

1999年3月

十三仏遺跡調査会  
麻生町教育委員会

茨城県行方郡麻生町

# 十三仏遺跡

第1次調査報告書

1999年3月

## 序

十三仏遺跡調査会長  
麻生町教育長

橋本豊榮

豊かな自然に恵まれた麻生町。霞ヶ浦と北浦のふたつの大きな湖に面し、水と緑の宝庫であり、古代より人々が生活するうえで恵まれた環境であった本町には、幾多の歴史が刻まれた埋蔵文化財をはじめとする貴重な文化財がたくさん残されています。

そして近年、文化財に対する关心とともに保護・保存、その活用への意識の高まりは格別のものがあります。

青沼字十三仏の土砂採取場計画地内には、平成3年から5年の分布調査時に確認された埋蔵文化財包蔵地が所在しておりました。この度の発掘調査は、事業者との間で協議のうえ可能な限り現状保存といたしました。

その結果、当該地域では主に古墳時代後半から奈良・平安時代に集落が形成されていたことが確実になり、当時の生活様式の一端を知るうえでこのうえない貴重な資料を得ることができました。

埋蔵文化財の保護に理解を示した関係各位には、深甚の敬意を捧げる次第です。末筆ではありますが、調査主任として現場調査から報告書執筆に至るまで御尽力を賜りました常総考古学研究所 藤原 均氏、そして経費負担に理解くださいました株式会社藤工、また発掘調査に従事いただいた作業員の皆々様に心から敬意を表し感謝申し上げ序といたします。

平成11年3月

## 例　　言

1. 本報告書は、茨城県行方郡麻生町青沼字十三仏に所在する十三仏遺跡の第1次調査報告書である。
1. 十三仏遺跡は、字十三仏全域に与えられた名称で、今回行なった調査地点は北側の十三仏988番2の1筆である。
1. 本遺跡の調査は、山砂採取事業に先行する埋蔵文化財の発掘調査である。
1. 本遺跡の調査は、遺構確認調査と本調査とに分けて行なった。確認調査は、教育委員会の指導で事業者（株式会社・藤工）と常総考古学研究所との一括依託で行ない、平成10年9月に行なった。
1. 本遺跡の本調査は、確認調査の結果を得て平成10年10月に実施した。調査に際し、調査会を組織して行ない 藤原 均（日本考古学協会会員・常総考古学研究所）が担当した。調査会の組織は、別項に記す。
1. 本報告書で縮尺は、以下に示した。これ以外は、その都度示した。  
住居址………平面図1/80、カマド1/40、土　　壙………平面図1/40  
土師器………1/4、石製模造品………1/1、　縄文土器………1/2
1. 本書では挿図、挿表、図版目次は作成せず、関係図版はその都度示した。
1. 本報告書で使用したスクリーントンは、凡例に示した。
1. 調査に際し、下記の方々の協力があつたため記して謝意を表する。

茨城県教育庁文化課、茨城県鹿行教育事務所、茨城県教育財團、麻生町シルバー人材センター、（株）藤工、村田行政書士事務所、（有）鳥居測量  
橋本豊榮（麻生町教育委員会教育長）、辻田 弘、長峯善男、平輪一郎、植田敏雄（以上麻生町文化財保護審議会委員）、藤崎忠徳、藤崎比左枝、佐々木久美子（藤工）、小倉博昭、額賀修一、貝塚浩美（以上教育委員会生涯学習課）

## 十三仏遺跡調査会組織

### 調査会

会長	橋本豊榮	麻生町教育委員会教育長	理事	藤崎比左枝	(株)藤工・代表取締役
副会長	迈田 弘	麻生町文化財保護審議会長	"	小倉 博昭	麻生町教育委員会生涯學習課長
理事	長峯善男	麻生町文化財保護審議会委員	監事	佐々木久美子	(株)藤工
"	平輪一郎	麻生町文化財保護審議会専門調査員	"	小室 旭	麻生町出納室長
"	植田敏雄	同 上	幹事	額賀 修一	麻生町教育委員会社会教育係長
"	藤原 均	調査主任・日本考古学協会員・常総考古学研究所	"	貝塚 浩美	麻生町教育委員会主事

### 調査団

団長	橋本豊榮	麻生町教育委員会教育長	調査員	榎本 哲之	仙台大O B
副団長	小倉博昭	麻生町教育委員会生涯學習課長	事務局	額賀 修一	麻生町教育委員会社会教育係長
主任	藤原 均	調査担当・常総考古学研究所	"	貝塚 浩美	麻生町教育委員会主事

作業員 細川登美子、宮本初江、長峰かね、迈田ふみ、柏葉幸子、今泉芳子、荒野とよ  
倉河 亘、生井沢絹代、棚谷なお、小林政子、長峰たけ、山口良子、小島美津代  
鬼澤まさ子、椎名兼夫、椎名安子、野川 普、大里三四治、土子三佐雄、市村徳子  
(以上麻生町)  
小笠原 哲、闇部八重子、山口典子、西沢千恵子、加藤美智子 (以上佐倉市)

## I 調査に至る経緯

平成9年6月に、株式会社藤工から麻生町青沼字十三仏に土採取場の計画があるので、埋蔵文化財の所在の照会があった。これを受けた麻生町教育委員会は、鹿行教育事務所埋蔵文化財指導員大沼信夫氏と現地の確認を行なった。ここには、茨城大学が行なった埋蔵文化財分布調査で発見された十三仏遺跡が所在していた。このことを、（株）藤工に調査結果として回答した。

平成10年9月に、遺構確認のため常総考古学研究所により遺構確認調査を行ない、遺構を把握した。この遺構確認調査をもとに、（株）藤工と協議して調査面積の確定と記録保存のための発掘調査をすることに合意した。発掘調査は、平成10年10月から実施することとした。

## II 調査の経緯

十三仏遺跡の調査は、遺構確認調査と本調査とに分けて行なった。遺構確認調査は、麻生町教育委員会の指導を受けて開発予定区域で、常総考古学研究所が平成10年9月に実施した。この結果、縄文時代から平安時代までの住居跡が多数発見された。住居跡は、古墳時代から奈良時代までの住居跡が中心のようである。

本調査は、確認調査の結果から調査区域の決定の後調査会を組織して行ない、平成10年10月より実施した。調査は、表土（耕作土）除去後精査を行ない、住居跡9軒と土壙2基を発見し、10月5日にこの作業を終了した。

遺構調査は、10年10月7日より実施し10月22日に全作業を終了した。この結果、第1号住居跡と重複して土壙1基（第2号土壙）と、第5号住居跡を掘切っている遺構1基（不明遺構）が新たに発見されている。発見した遺構は、住居跡9軒、土壙3基、不明遺構1基である。

整理作業は、平成10年10月23日より11月末日まで行なった。報告書執筆・編集作業は、10年11月から12月にかけて行ない、全作業を終了した。



- |            |             |             |
|------------|-------------|-------------|
| 1). 十三仏遺跡  | 8). 松古屋古墳群  | 15). 瓢箪塚古墳群 |
| 2). 波籠廃寺遺跡 | 9). 新地東遺跡   | 16). 楯の台城跡  |
| 3). 中林遺跡   | 10). 波籠中央遺跡 | 17). シタキ遺跡  |
| 4). 笹塚遺跡   | 11). 石神城跡   | 18). 長貫遺跡   |
| 5). 引取遺跡   | 12). 上ノ久保遺跡 |             |
| 6). 引取北遺跡  | 13). 熊野神社貝塚 | (地名は「麻生町遺   |
| 7). 新地西遺跡  | 14). 向地古墳群  | 跡地名表」による)   |

第1図 遺跡位置図 (S~1/20,000)

### III 位置と環境

当十三仏遺跡は、茨城県行方郡麻生町青沼字十三仏に所在している。麻生町は、行方台地の東部で北浦と霞ヶ浦に狭まれており、この両浦に流入する河川により開折された開折谷が内陸部まで入り込んでいるために、複雑な地形を形成している。

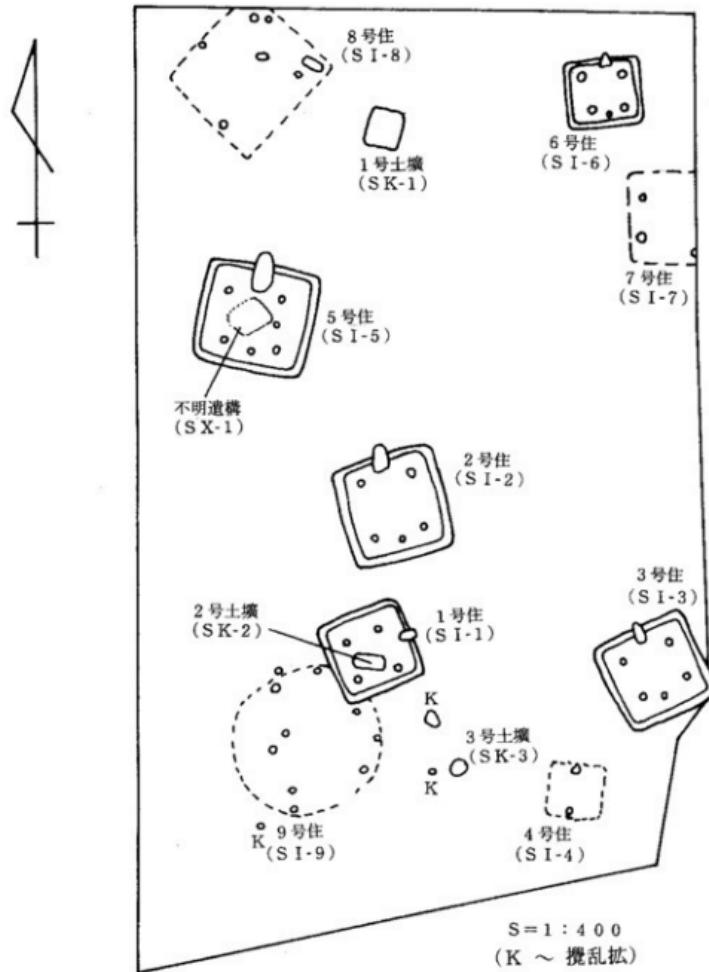
麻生町では、北側が藏川と雁通川及びこれに流入する小河川が北浦に流入しており、南側では霞ヶ浦に流入する城下川と夜起川及びこれに流入する小河川により台地が形成されており、台地内陸部では比較的広い台地となっているが、先端部分では細長く突出する舌状台地となっている。

十三仏遺跡は、麻生町の北部で雁通川水系に属する台地上に所在している。台地としては、東西方向に広く伸びている台地から北方に向って細長く突出した舌状台地上に所在し、1991～94年にかけて行なわれた分布調査で発見された遺跡である。台地は標高34～35m程度で、北方に向か緩やかに傾斜しており、中央部には東方より小支谷が入り込み北側、西側は開折谷に面している。遺跡は、このような台地全域に広がっている。

当遺跡は、雁通川水系に属することから周辺にも多くの遺跡が所在している。特に雁通川と藏川に狭まれた台地には、縄文時代から中世までの遺跡が多数所在している。縄文時代では、南西に中林遺跡（3）、南方に熊野神社貝塚（13）があり、複合遺跡としては筆塚遺跡（4）、長貫遺跡（18）、新地東遺跡（9）、上ノ久保遺跡（12）などの諸遺跡が所在している。古墳時代以降の散布地としては、引取北遺跡（6）、波籠中央遺跡（10）、シタキ遺跡（17）などの遺跡が所在している。上ノ久保遺跡やシタキ遺跡は、弥生式土器片も散布していることから同時代の遺跡でもある。古墳群としては、根古屋古墳群（8）、向地古墳群（14）、瓢箪塚古墳群（15）などの古墳群が知られている。また廃寺跡としては、平安時代とされている波籠廃寺遺跡がある。

中世では、雁通川の両岸に石神城跡（11）、楯の台城跡（16）が知られており、筆塚遺跡、新地東遺跡も鎌倉時代の遺跡とされている。

このように、当遺跡の周辺には多くの遺跡が所在しているものの、台地の先端部や河川の周辺に多くの遺跡が所在しているが、台地の内陸部に入るにつれて遺跡数は減少する傾向を有している。このことは、麻生町のみならず周辺地域でも同様の事と推察される。



第2図 調査区内遺構全測図

## IV 調査結果の概要

十三仏遺跡の調査結果は、第2図と第1表で示したように住居跡が9軒（SI-1～9）と、3基の土壙（SK-1～3）及び不明遺構1基（SX-1）が発見されている。9軒の住居跡は掘り込みを有する住居跡が5軒（SI-1・2・3・5・6）と、床面で発見された住居跡が5軒（SI-4・7・8・9）である。時期別では、縄文時代の住居跡が1軒（SI-9）、古墳時代の住居跡が1軒（SI-8）、古墳時代後半～奈良時代前半の住居跡が6軒（SI-1・2・3・5・7）、奈良時代の住居跡が1軒（SI-6）、平安時代の住居跡が1軒（SI-4）である。

3基の土壙は、縄文時代と推定される土壙が1基（SK-3）、古墳時代以降の土壙としては2基（SK-1・2）である。3基とも出土遺物が皆無のため、確実な時期決定は不可能である。

不明遺構（SX-1）は、第5号住居跡（SI-5）の中央部分を掘り切っており、床面の一部は貼床状にしっかりした部分が遺存しているのみで時期決定可能な遺物は出土しなかった。

縄文時代の住居跡は、第9号住居跡（SI-9）がある。炉跡と柱穴で発見された住居跡であるが、出土遺物が皆無であるため具体的な時期を決定することは不可能である。そのプランから推定するならば、縄文時代後期に位置する住居跡と推定される。

古墳時代の住居跡は、第8号住居跡（SI-8）がある。本跡もSI-9と同様に、床面で発見されているものの炉跡・貯藏穴・柱穴以外不明である。出土遺物も皆無のために、具体的な時代を決定することは不可能であるが、遺構から古墳時代に位置する住居跡と推定される。

古墳時代後半～奈良時代前半にかけての住居跡では、第1号・2号・3号・5号・7号住居址（SI-1・2・3・5・7）がある。第7号住居跡（SI-7）を除いて、掘り込みを有している住居跡である。また第1号住居跡（SI-1）が東カマドである以外は、北壁にカマドを有する住居跡である。第7号住居跡のカマドは、不明である。床面は比較的しっかりした床面で、5本の柱穴を有している。各住居跡のカマドは、砂質の暗褐色土を多用しているものの砂質粘土はあまり使用されていない。出土遺物としては、覆土内より縄文式土器片、土師器坏、高坏、甕等が破片で出土しており、床面及び床面付近からは土師器坏、高坏、小型坏、甕、石製模造品、土玉等が出土している。カマド内からは、土師器坏、甕、支脚等が出土している。

奈良時代の住居跡としては、第6号住居跡（SI-6）がある。北壁にカマドを有し、比較的しっかりした床面で5本の柱穴を有している。カマドは、比較的しっかりしたカマドで土師器櫃が逆位で燃焼部に設置されている。出土遺物としては、覆土内より土師器坏、甕が破片で出土しており床面及び床面付近からは土師器坏、甕が出土している。

第1表 遺構一覧表

名 称	方 位	規 模 (m)			形 状	カ マ ド	柱 数	備 考
		東 西	南 北	深 さ				
第1号住居跡	N-0°-E	5.00	4.70	0.38	隅丸長方形	東壁中央部	4	第2号土壤と重複
第2号住居跡	N-22°-W	5.63	5.52	0.70	隅丸方形	北壁中央部	5	
第3号住居跡	N-25°-W	5.23	5.25	0.70	隅丸方形	北壁中央東側	5	一部耕作攪乱を受けている
第4号住居跡	N-3°-W	3.00	3.00		正方形状	北壁中央部	1	カマドと柱穴以外不明
第5号住居跡	N-5°-E	6.10	5.80	0.70	隅丸長方形	北壁中央部	6	中央部で不明遺構と重複
第6号住居跡	N-10°-W	4.12	3.86	0.59	隅丸方形	北壁中央部	5	南側コーナーに壁柱穴有
第7号住居跡	N-3°-W	4.90	4.90		正方形状		3	東壁は町道で調査不能
第8号住居跡	N-45°-E	6.40	6.70		正方形状	中央北に炉有	5	床面での確認
第9号住居跡	N-15°-E	6.50	7.50		円 形 状	中央北に炉有	14	炉と柱穴で確認
第1号 土 壤	N-7°-E	2.03	1.80	0.18	隅丸長方形			覆土に炭化物を含む
第2号 土 壤	N-73°-W	1.55	0.66	0.17	不整長方形			第1号住居跡と重複
第3号 土 壤	N-82°-W	0.98	0.88	0.23	椭円形状			
不 明 遺 構	北西方向か	2.80	2.30	0.80	長方形状			第5号住を切る小窪穴か

平安時代の住居跡は、第4号住居跡(SI-4)1軒が発見されている。床面での発見であるために、カマドの火床部と1本の柱穴以外消失している。火床部には、焼土が堆積している。

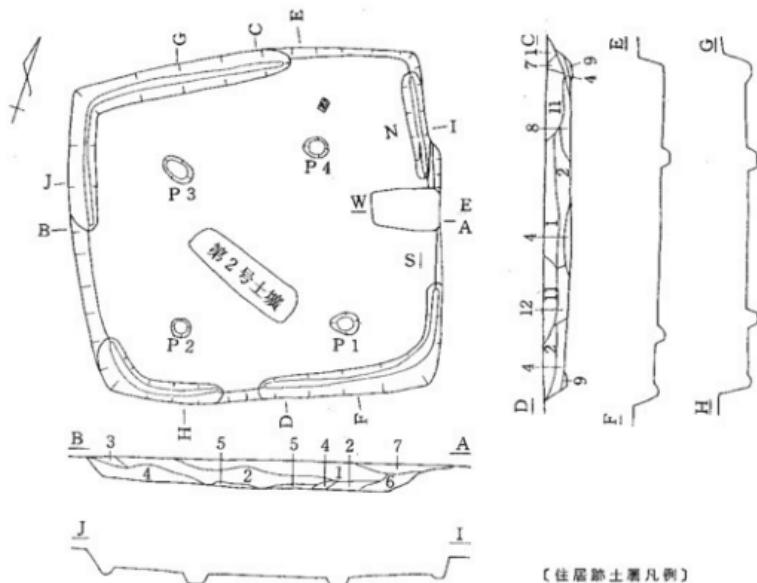
古墳時代後半から奈良時代までの住居跡は、土層の堆積状況が多少異っているものの床面上に厚く黄褐色土(ローム粒子・ロームブロック主体)が堆積している。これは各住居跡が、廃棄後まもなく人為的に埋められた状況を示している。この後に、自然堆積したようである。以下に、各遺構について記述する。

## V 遺構と遺物

### 1. 住居跡

#### 第1号住居跡(第3図、図版3・6)

第1号住居跡(SI-1)は、調査区の中央南側に位置しており、第9号住居跡(SI-9)と重複している。大きさは、東西径5.00m、南北径4.70m、深さ0.38mでN-0°-Eに方位を



有し、隅丸長方形状を呈している。床は柔弱な床面で、壁はほぼ垂直に掘り込まれているが北壁と南壁は、緩やかな弧を画いて掘り込まれているため西壁は東壁より0.50m程短くなっている。壁溝は、部分的に掘り込まれているのみで全周しておらず、幅0.15~0.25m、深さ0.03~0.07mで掘り込まれている。柱穴は、対角線上に4本（P1~4）掘り込まれているのみで、4柱穴とも0.10m程度と浅い柱穴である。カマドは、東壁中央部に設置されているが袖の一部は破壊され消失している。

土層は黒色土、暗褐色土、黄褐色土、赤褐色土、黒褐色土が堆積しており、黒色土が2層に、暗褐色土が4層に、黄褐色土が3層に、黒褐色土が2層に各々細分される。土層の堆積状況は、床面上に黄褐色土（第4・5層）が厚く堆積していることから、本跡は廃棄後まもなく人為的に埋められてから自然埋没したようである。また第11、12層の黒褐色土は、耕作等による擾乱層である。

カマドは東壁の中央部に設置されているが、中央部より南側は破壊されて消失している。確認面での大きさは、長さ1.18m、幅0.83m、高さ0.40mを計測する。焚口部は、床面から0.06~0.07m程度高くなっている。火床部は住居跡の床面より0.03m低く、焚口部からは0.06m程度低く緩やかに下降している。燃焼部には、焼土層の堆積は見られず赤褐色土（第3層）が堆積しているのみで、火床部下位面もほとんど焼けていない。壁は砂質粘土が使用されておらず、砂質の暗褐色土（第1層）を用いて壁を構築している。

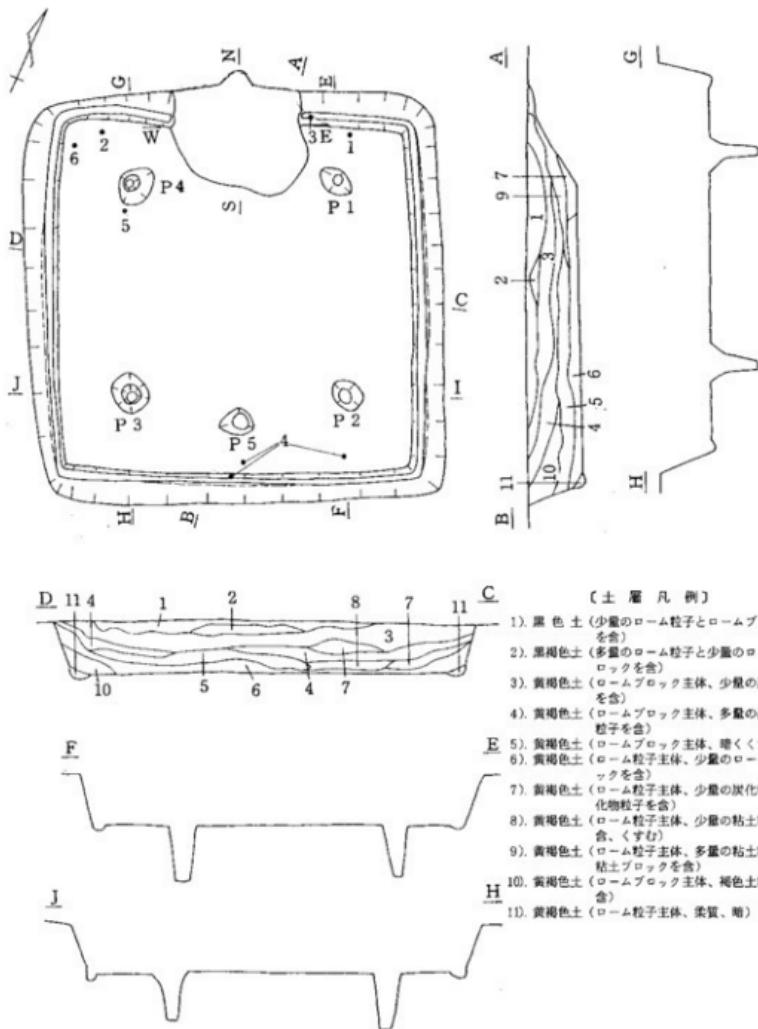
出土遺物としては、第1・2層内より土師器壺、甕が破片で少量出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。

出土した遺物から本跡は、古墳時代後半～奈良時代前半にかけての住居跡と判断される。

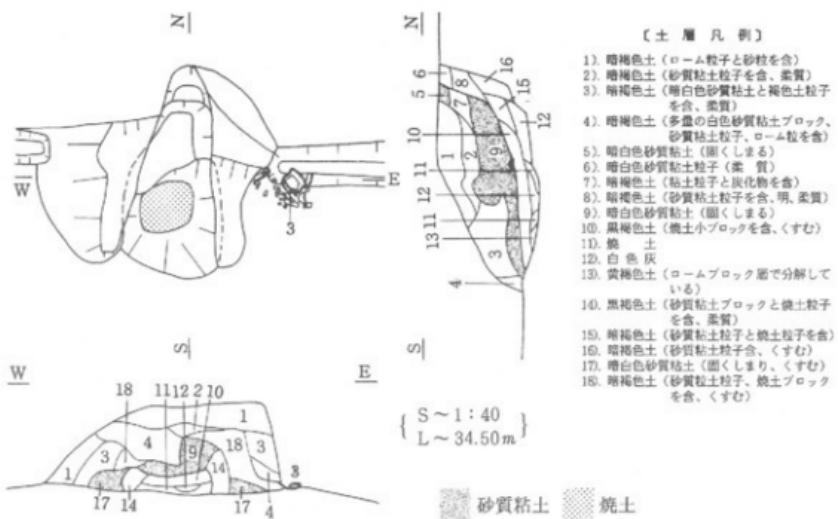
#### 第2号住居跡（第4・5・15図、第2表図版4・7）

第2号住居跡（S I-2）は、調査区のはば中央部でS I-1の北西隣に位置している。大きさは東西径5.63m、南北径5.52m、深さ0.70mでN-22°-Wに方位を有し、隅丸方形状を呈している。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝は幅0.10~0.20m、深さ0.04~0.08mでカマドの部分を除き全周しており、東壁、西壁、南壁では壁溝上面が0.03~0.05m程度オーバーハングしている。床面はしっかりした床面で、柱穴は対角線上に4本（P1~4）と住居跡の中央南側に1本（P5）の5本掘り込まれており、深くしっかりした柱穴である。カマドは、北壁中央部に設置されている。

土層は、黒色土、黒褐色土、黄褐色土が堆積しており、黄褐色土が9層に細分される。この黄褐色土は、ローム粒子とロームブロックが主体の黄褐色土で、床面上に厚く堆積していることから本跡は廃棄後まもなく人為的に埋められた後、黑色土（第1層）と黒褐色土（第2層）の自然



第4図 第2号住居跡実測図 (S~1:80, L~34.70m)



第5図 第2号住居跡カマド実測図

堆積により埋没したようである。

カマドは、北壁の中央部に設置されている。大きさは長さ1.38m、幅1.55m、高さ0.55mを計測する。燃焼部はカマドの中央部南側で、焼土（第11層）と焼土上面に黒褐色土（第10層）が堆積している。火床部は、床面より0.10m程度下がっており良く分解している。煙道部は、火床部より0.40m程度突出してからほぼ垂直に立ち上がり、先端は住居跡の北壁より0.35m程度突出している。煙道部には灰層（第12層）、暗褐色土（第8、15、16層）、暗白色砂質粘土（第6層）が堆積している。壁は、基底部に少量の白色砂質粘土（第17層）を用いてから合計4層の砂質暗褐色土（第1・2・7・18・21層）と、暗白色砂質粘土（第5層）を用いて壁を構築している。砂質粘土は、比較的の少量でやや柔質な粘土である。また壁溝は、火床部まで掘り込まれており、この部分を埋めてからカマドの壁を構築している。

出土遺物としては、住居跡の覆土内より土師器壺、甕等が破片で出土しており、床面及び床面附近からは土師器壺、甕、塊、石製模造品が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器甕（N 0 1～4）、石製模造品（N 0 5）、紡錘車（N 0 6）の6点である。

出土遺物から本跡は、古墳時代後半～奈良時代前半の住居跡と判断される。

### 第3号住居跡（第6・7・15・16図、第2・3表、図版4・7）

第3号住居跡（S I-3）は、S I-1の東側で調査区の南東端部に位置しており、南東コーナー部は耕作土壌で破壊されている。大きさは東西径5.23m、南北径5.25m、深さ0.70mで方位をN-25°-Wに有し、隅丸方形形状を呈している。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、床面はやや柔弱な床面となっている。壁溝は、カマドの部分を除いて全周しており、幅0.15~0.20m、深さ0.04~0.08mを計測する。東壁と南壁の部分では、オーバーハングしている。柱穴は対角線上に4本（P1~4）と、中央南側に1本（P5）の5本掘り込まれているが、各柱穴は浅い柱穴でP3は一度建替られている。カマドは、北壁中央や東側に設置されている。

土層は、暗褐色土、黒色土、黒褐色土、黄褐色土が堆積しており、暗褐色土が3層に、黒褐色土が2層に、黄褐色土が2層に各々細分される。床面には、暗褐色土（第5・8層）が堆積した後黄褐色土（第7層）が厚く堆積していることから、本跡は廃棄後まもなく人為的に埋められた後に自然埋没した状況を示している。

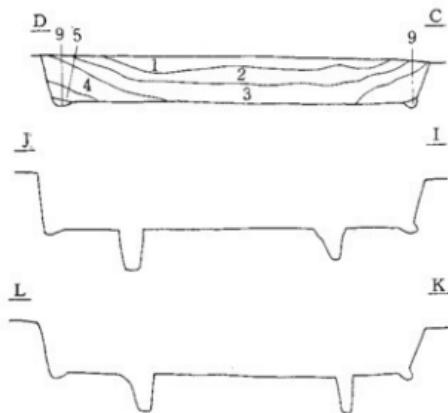
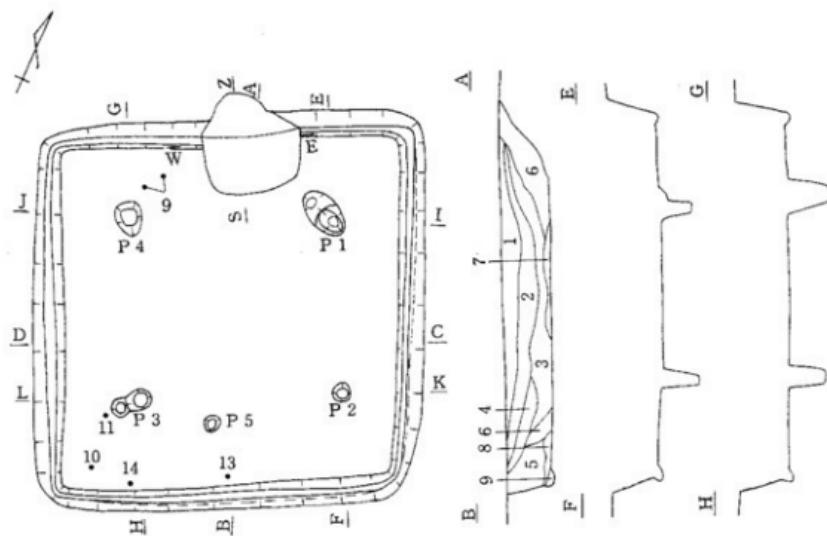
カマドは、北壁中央部のやや東側に設置されており長さ1.30m、幅1.43m、高さ0.70mを計測する。燃焼部は、カマドの中央や南側で住居跡の床面とほぼ同じ高さに位置しているが、焼土層の堆積は無く黒褐色土（第13層）が厚く堆積している。火床部は、良く分解している。煙道部は燃焼部とほぼ水平で0.35m突出してからほぼ垂直に立ち上がり、先端は住居跡の北壁より0.28m程度突出している。煙道部には、黒褐色土（第4・10・12層）と暗褐色土（第11層）が堆積している。壁は、砂質粘土（第2・5・8・9・17層）を使用しているが、基底部には使用されておらず壁上面と外側に使用されているのみである。基底部や燃焼部上面には、黒褐色土（第3・6層）が用いられている。この上面と側面に、砂質粘土が用いられている。粘土の量は、他のカマドよりは多く使用されている。

出土遺物としては、覆土内より土師器壺、高杯、甕、瓶等が破片で出土しており、床面及び床面付近からは上師器壺、高杯、甕が出土している。カマド内からは、土師器甕が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器壺（N°9・11）、高杯（N°10）、甕（N°12~14）の6点である。

これらの出土遺物から本跡は、古墳時代後半~奈良時代前半の住居跡と判断される。

### 第4号住居跡（第7図、図版4）

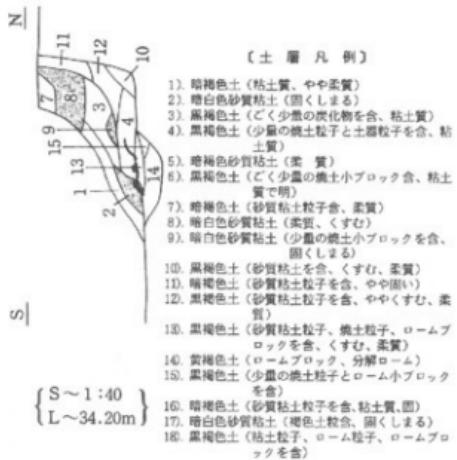
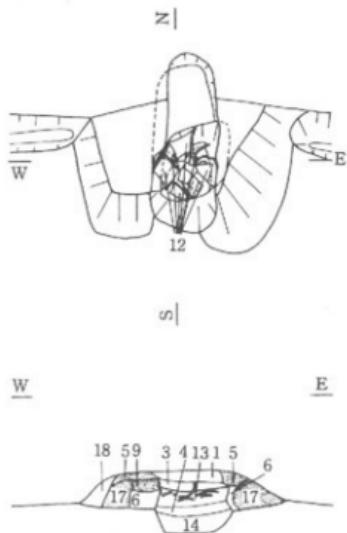
第4号住居跡（S I-4）は、調査区の南東コーナー部でS I-3の南西部に位置し、カマドの一部と1本の柱穴で確認された住居跡である。壁と壁溝は消失しており、カマドは火床部のみ遺存している。カマドと柱穴から、本跡は1辺が3m程度で正方形形状を呈する住居跡と推定されN-3°-Wに方位を有するようである。



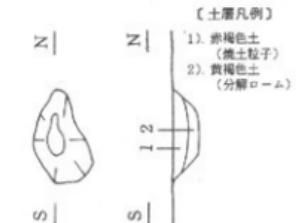
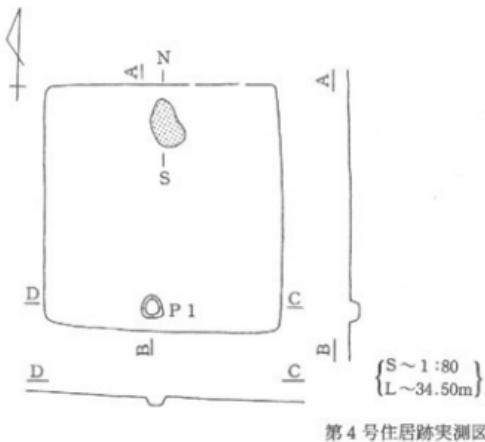
【土層凡例】

- 1). 暗褐色土（ローム粒子と少量のローム小ブロックを含）
- 2). 黒色土（少量のローム粒子とローム小ブロックを含）
- 3). 黑褐色土（ローム粒子、ロームブロック、土器粒子を含、明）
- 4). 黄褐色土（多量のローム粒子とローム小ブロック主体、くすむ）
- 5). 暗褐色土（ローム粒子を含、明、柔質）
- 6). 黑褐色土（粘土粒子、ローム粒子、土器粒子を含、明）
- 7). 黄褐色土（ローム粒子、ロームブロック主体、柔質）
- 8). 暗褐色土（少量のローム粒子とローム小ブロックを含、明）
- 9). 黄褐色土（ローム小ブロック主体、明、柔質）

第6図 第3号住居跡実測図 (S~1:80, L~34.70m)



第3号住居跡カマド実測図



第4号住居跡カマド実測図

$\{ S \sim 1:40 \\ L \sim 34.50m \}$

焼土

第7図 第3号住居跡カマド・第4号住居跡実測図

床面の状況は不明で、柱穴はカマドの南側に1本掘り込まれているのみであり浅い柱穴となっている。カマドは、火床部が遺存しているのみで焼土が厚く堆積しており、下位面も良く分解している。

出土遺物としては、推定範囲内から確認作業中に土師器坏片と縄文式土器片が各1点の合計2点出土したのみで、時期決定可能な遺物は出土しなかった。

推定プランから本跡は、平安時代に位置する住居跡と推定される。

#### 第5号住居跡（第8・10・15・16図、第3・4表、図版4・6・7・8）

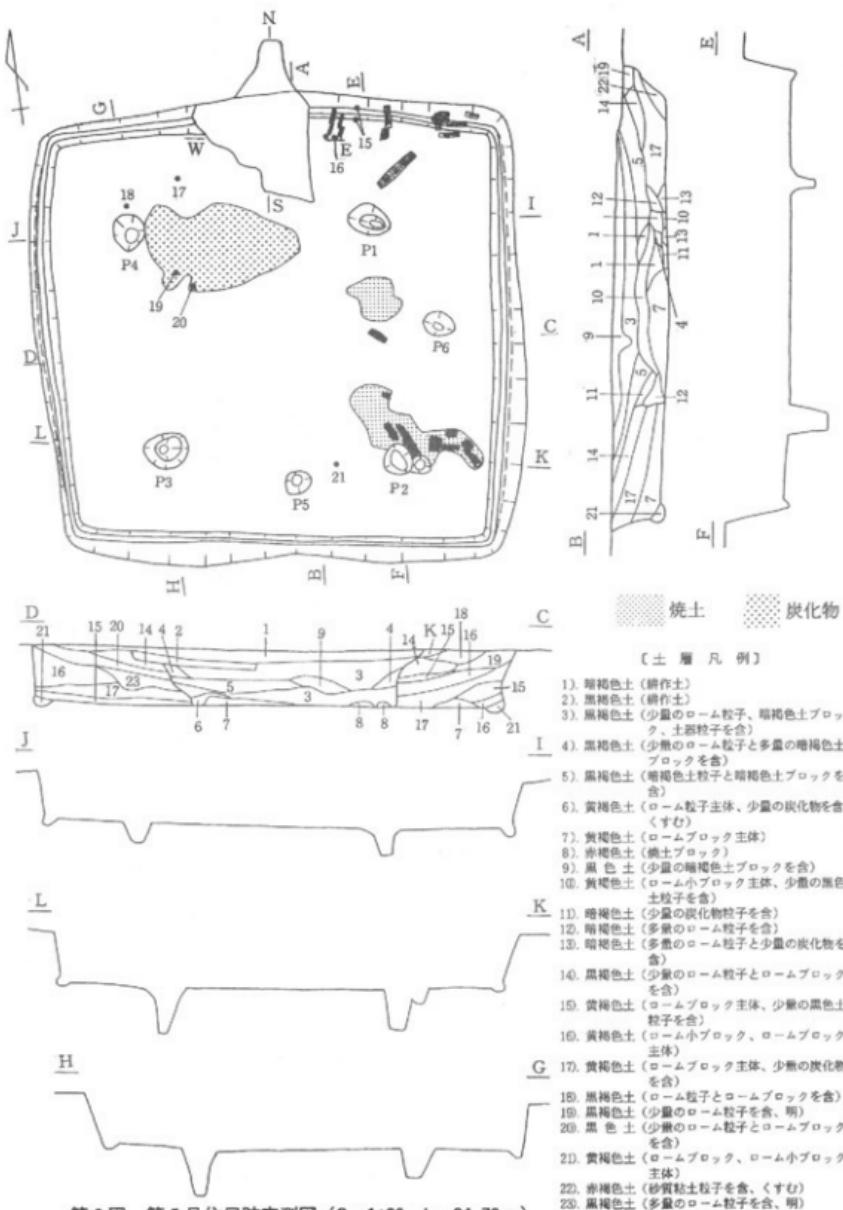
第5号住居跡（S I-5）は、調査区の中央西側で耕作等により遺構の上面が破壊されている。大きさは東西径6.10m、南北径5.80m、深さ0.70mでN-5°-Eに方位を有し、隅丸長方形状を呈している。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、床面はやや柔弱な床面となっている。壁溝はカマドの部分を除き幅0.10~0.25m、深さ0.03~0.08mで全周しており、東壁と西壁で壁溝上面が0.05m程度オーバーハングしている。柱穴は対角線上に4本（P 1~4）と、中央南側に1本（P 5）の5本掘り込まれているが、東側の柱穴（P 6）は本跡に結び付く柱穴であるかは不明である。カマドは、北壁中央部に設置されているものの中央西側は、一部が破壊されている。

土層は、黄褐色土、黒褐色土、黒色土が堆積しており、黄褐色土が5層に、黒褐色土が3層に各々細分される。各土層の堆積状況は、床面から覆土の中位層までローム粒子、ロームブロック主体の黄褐色土（第7・15・17層）が堆積していることから、本跡は廃棄後まもなく人為的に埋められた後に自然埋没したようである。また第3層～13層までは、本跡を掘り切っている遺構の土層（S X-1）である。床面上には、焼土と炭が堆積している。

カマドは、西側袖の先端部分が一部破壊され消失している。大きさは長さ1.75m、幅0.90m、高さ0.60mを計測する。燃焼部はカマドのほぼ中央部で、床面より0.05m程度掘り下げて火床部としている。燃焼部には、赤褐色土（第4層）が厚く堆積している。赤褐色土の下位には、黒褐色土（第7層）が厚く堆積しており、この上面に土製支脚（No 24）が設置されている。壁では砂質の暗褐色土（第1・2層）を用いて構築しているものの、粘土は使用されていない。カマドの壁は、火床部付近まで掘り込まれている壁溝を埋めて構築している。

出土遺物としては、覆土内より土師器坏、甕等が破片で出土しており、床面及び床面付近からは土師器坏、高坏、土玉、小型坏等が出土している。またカマド内からは、土師器坏、甕、土製支脚が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器坏3点（No 15・16・23）、小型坏2点（No 17・18）、高坏1点（No 19）、甕2点（No 22・25）、土製支脚1点（No 24）、土玉1点（No 20）、石器1点（No 21）の11点である。

これらの出土遺物から本跡は、古墳時代後半～奈良時代前半の住居跡と判断される。



第8図 第5号住居跡実測図 (S~1:80, L~34.70m)

#### 第6号住居跡（第9・10・16・17図、第4・5表、図版5・6・7・8）

第6号住居跡（S I-6）は、調査区の北東コーナー部に位置している。大きさは東西径4.12m、南北径3.86m、深さ0.59mでN-10°-Wに方位を有し隅丸方形状を呈している。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、床面は比較的しっかりした床面となっている。壁溝はカマドの部分を除き幅0.16~0.20m、深さ0.03~0.04mで全周しており、北壁の部分を除き壁溝の上面は0.05m程度オーバーハングしている。柱穴は対角線上に4本（P 1~4）と、中央南側に1本（P 5）の5本掘り込まれているが、西側の2本（P 3・4）はやや北側に寄った所に掘り込まれている。また南壁の両コーナー部には、壁柱穴と推定される柱穴状の掘り込み（P 6・7）が壁溝底面まで掘り込まれている。この2柱穴は、本跡で発見されたのみである。カマドは、北壁中央部に設置されている。

土層は、黒褐色土、黒色土、黄褐色土、暗褐色土が堆積しており、黒褐色土が3層に、黄褐色土が4層に、暗褐色土が2層に各々細分される。これらの堆積状況は、床面上にローム粒子とロームブロック主体の黄褐色土（第3~6層）が覆土中位まで堆積している。この堆積状況から本跡は、廃棄後まもなく人為的に埋められてから自然埋没したようである。

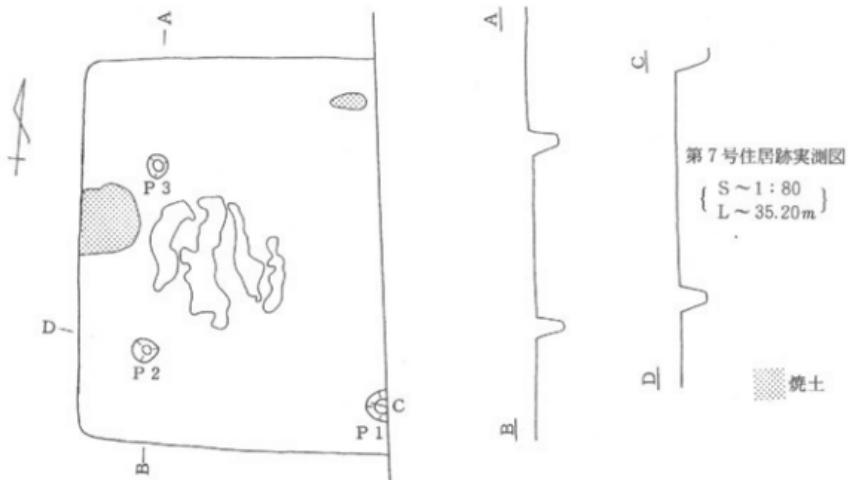
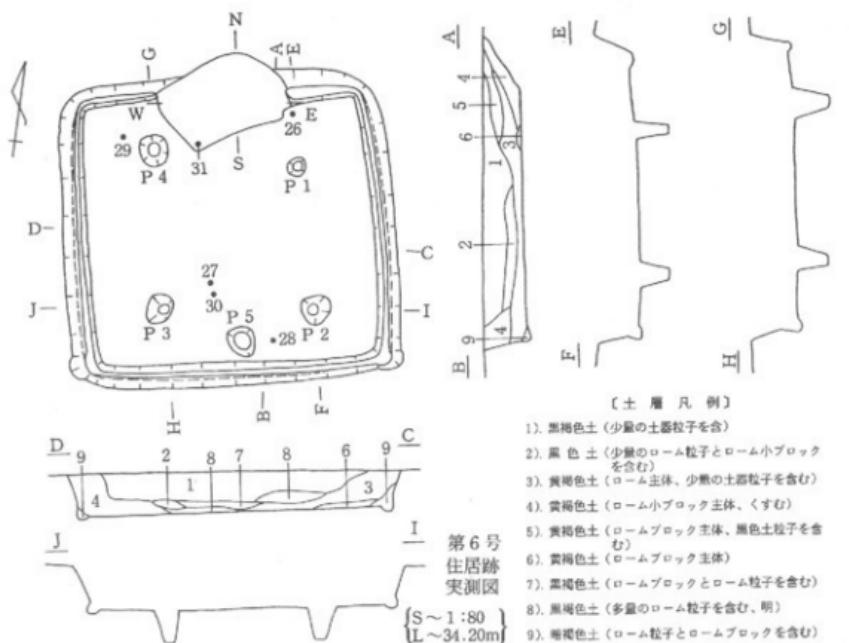
カマドは、北壁の中央部に設置されており長さ1.13m、幅1.50m、高さ0.48mを計測する。燃焼部はカマドの中央南側で、焼土層は堆積しておらず黒褐色土（第2・3層）が厚く堆積しているのみで、黒褐色土（第3層）下位のローム面は良く分解している。火床部は、床面より0.02m程度下がっているが、焚口部が床面より0.04m程度高くなっているため火床部は、焚口部からだと0.06m程度下がっている。煙道部は、燃焼部よりほぼ水平に0.28m程度突出した後緩やかに立ち上がり、先端は住居跡の北壁より0.25m程度突出している。壁は、底面に砂質粘土（第10層）を用いて基底部を構築した後に、砂質の暗褐色土（第1・4・6層）を用いて壁を構築している。

出土遺物としては、覆土内より土師器壺、甕片等が出土しており、床面及び床面付近からは土師器壺、高壺、塊、甕等が出土している。カマド内からは、土師器甕、甕が出土している。これらの出土遺物で示出来たのは、土師器壺3点（No 26~28）、塊（No 29）、高壺（No 30）甕1点（No 31）、甕1点（No 32）の7点である。

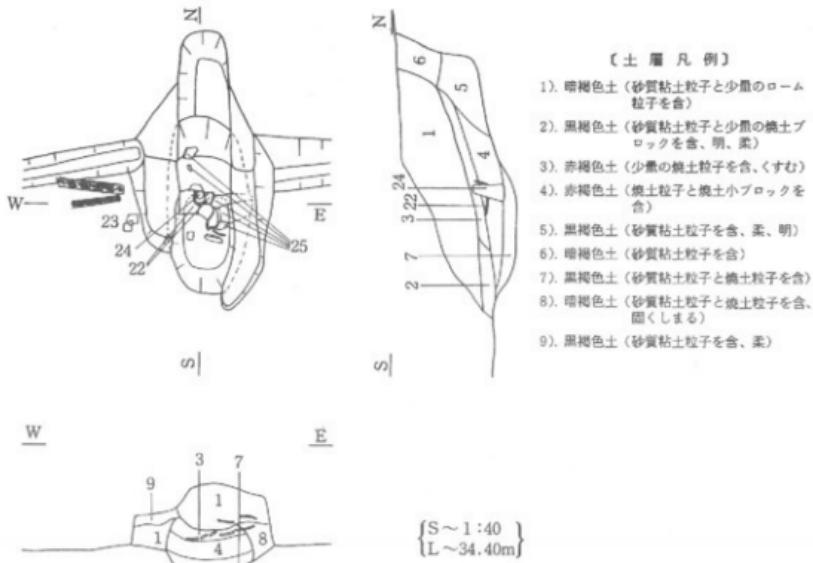
これらの出土遺物から本跡は、奈良時代の住居跡と判断される。

#### 第7号住居跡（第9図、図版5）

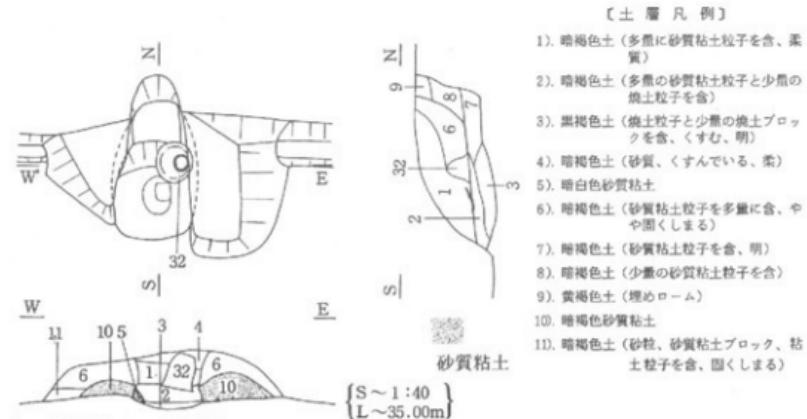
第7号住居跡は、調査区の北東端部でS I-6の南側に位置しているが、東壁部分は町道下に所在するため調査出来なかった。また遺構の大部分は、S I-4と同様耕作攪乱を受け消失している。確認出来た遺構としては、3本の柱穴と壁の一部（町道と調査区の境で確認）である。これから推定すると本跡は、1辺が4.90m程度で方形状を呈する住居跡でN-3°-Wに方位を有



第9図 第6号・第7号住居跡実測図



第5号住居跡カマド実測図



第6号住居跡カマド実測図

第10図 第5号・6号住居跡カマド実測図

#### 〔土層凡例〕

- 1). 暗褐色土（砂質粘土粒子と少量のローム粒子を含）
- 2). 黒褐色土（砂質粘土粒子と少量の燒土ブロックを含、明、柔）
- 3). 赤褐色土（少量の燒土粒子を含、くすむ）
- 4). 赤褐色土（燒土粒子と燒土小ブロックを含）
- 5). 黑褐色土（砂質粘土粒子を含、柔、明）
- 6). 暗褐色土（砂質粘土粒子を含）
- 7). 暖褐色土（砂質粘土粒子と燒土粒子を含）
- 8). 暗褐色土（砂質粘土粒子と燒土粒子を含、固くしまる）
- 9). 黑褐色土（砂質粘土粒子を含、柔）

#### 〔土層凡例〕

- 1). 暗褐色土（多量に砂質粘土粒子を含、柔質）
- 2). 暗褐色土（多量の砂質粘土粒子と少量の燒土粒子を含）
- 3). 黑褐色土（燒土粒子と少量の燒土ブロックを含、くすむ、明）
- 4). 暗褐色土（砂質、くすんでいる、柔）
- 5). 暗白色砂質粘土
- 6). 暗褐色土（砂質粘土粒子を多量に含、やや固くしまる）
- 7). 暖褐色土（砂質粘土粒子を含、明）
- 8). 暗褐色土（少量の砂質粘土粒子を含）
- 9). 黄褐色土（埋めローム）
- 10). 暖褐色砂質粘土
- 11). 暗褐色土（砂質、砂質粘土ブロック、粘土粒子を含、固くしまる）

しているようである。床面の状況は不明で、壁は確認された部分からほぼ垂直に掘り込まれているようである。壁溝は認められず、柱穴は3本（P1～3）認められ対角線上に掘り込まれているようである。また南西部の柱穴（P2）は、北に寄った所に掘り込まれている。3本の柱穴は深さ0.30m代で比較的浅い柱穴となっている。カマドは、調査範囲内では確認されなかった。

土層は、壁が確認された部分でローム粒子を含む黒色土が1層確認されたのみである。また住居跡の北側と西側（西壁部分）に焼土が堆積しているものの、北側の焼土は流入による焼土で西側の焼土は焼土ブロック層（径1mm程度）であり、下位のローム面にも変化した所は無く本跡に結び付くかどうかは確定し得ない。

出土遺物としては、造構の推定範囲内より土師器壺、甕等が破片で出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。

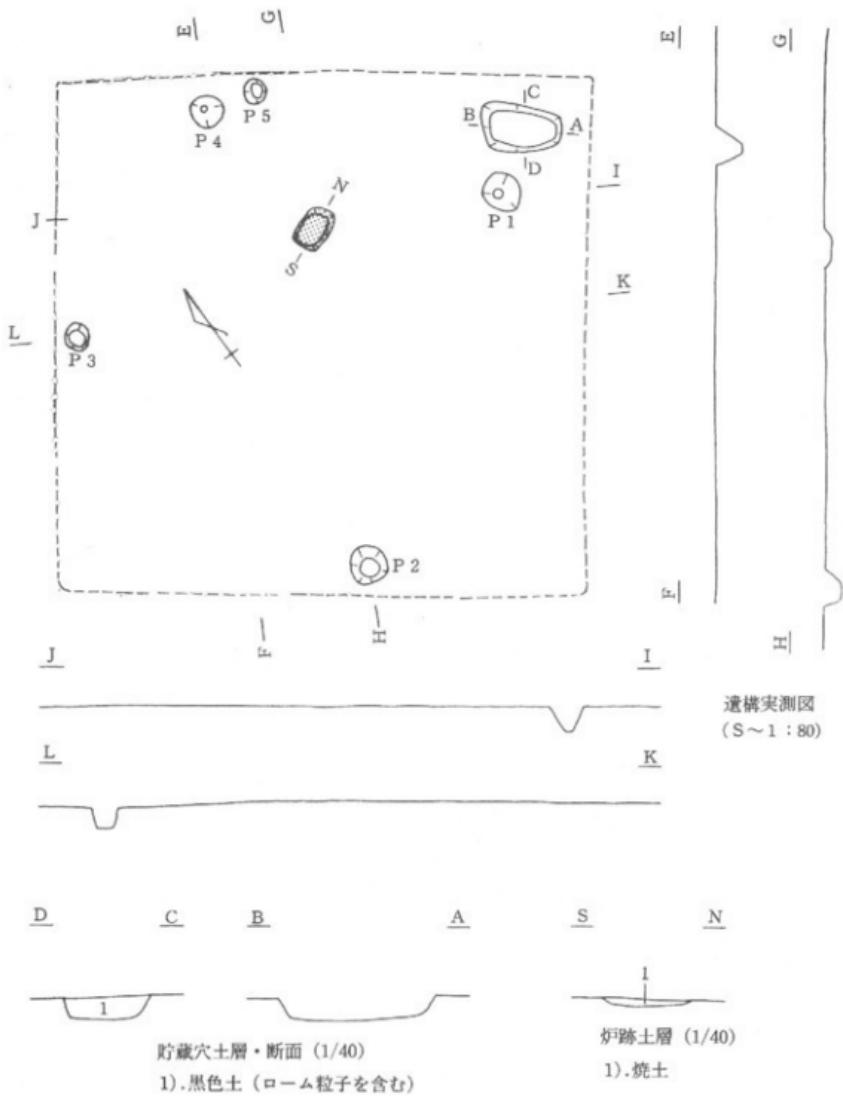
出土した遺物と造構の推定範囲から本跡は、古墳時代後半から奈良時代前半頃までの住居跡と推定される。

#### 第8号住居跡（第11図、図版5）

第8号住居跡（S1-8）は、調査区の北西端部で発見された住居跡であり、炉跡、貯蔵穴、柱穴が確認されたのみで壁と壁溝及び床面は確認出来なかった。造構の推定範囲内から土器片が出土しており、造構の一部が確認されているため住居跡とした。

本跡の推定範囲は、東西径6.40m、南北径6.70m程度でN-45°-Eに方位を有し長方形状を呈する住居跡と推定される。床面、壁、壁溝は不明で、住居跡の中央北側に炉跡が遺存している。炉跡は、長径0.55m、短径0.38m、深さ0.55mで長方形を呈して、焼土が厚く堆積し下位のローム面はあまり分解していない。貯蔵穴は、北東コーナー付近に掘り込まれているようで長径1.00m、短径0.58m、深さ0.16mを測る長方形状を呈している。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。貯蔵穴内には、ローム粒子を含む黒色土と暗褐色土が堆積している。柱穴は、合計5本（P1～5）確認されたのみである。P1とP4は、各々北側コーナー付近に掘り込まれた柱穴であろうし、P2は中央南側で南壁付近に掘り込まれた柱穴と推定される。南側コーナーの2柱穴は、確認されなかった。P3と5は、本跡に結び付くか確定出来ない。各柱穴の深さは、0.30m程度と比較的浅い柱穴となっている。

出土遺物としては、推定範囲内より少量の土師器甕片が出土しているものの、時期を特定出来る遺物は出土しなかった。確認された造構の状況から本跡は、古墳時代に位置する住居跡と推定される。



第11図 第8号住居跡実測図 (L ~ 34.70m)

### 第9号住居跡（第12図、図版5）

第9号住居跡（S I-9）は、S I-1の南西部に位置しており、炉跡と7本の柱穴で発見された住居跡であるため、壁と床面の状況は不明である。

推定での大きさは、東西径6.50m、南北径7.50m程度でN-15°-Eに方位を有し、楕円形状を呈する住居跡と推定される。炉跡は、住居跡の中央東側で南北方向に長軸を有し、長径0.70m短径0.40m、深さ0.03m程度で楕円形をなしている。炉跡内には、焼土が堆積しているものの下位のローム面はあまり焼けていない。

柱穴は、楕円形状に10本（P1～10）認められたが、北西部のP7とP9の間には1本も認められなかった。確認された10本の柱穴は、P6とP7の2柱穴が比較的大きな柱穴である以外小さな柱穴で、深さも0.30mと比較的浅い柱穴が中心となっている。また、南側の1本（P11）及び北西部1本（P12）の2柱穴は、本跡に結び付く柱穴であるかは確定し得ない。

出土遺物としては、柱穴と炉跡及び遺構の範囲内から何ら出土しなかったために、具体的な時期を決定することは出来なかったが、縄文時代後期に位置する住居跡と推定される。

## 2. 土 壤（第13図、図版6）

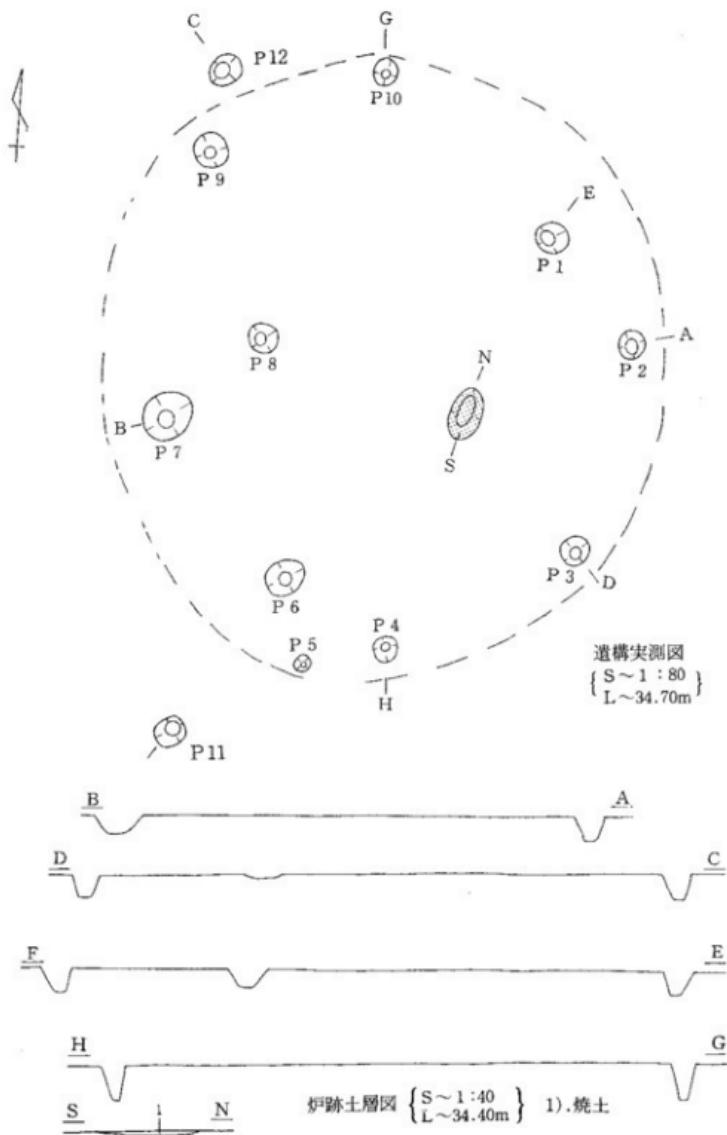
### 第1号土壤

第1号土壤（SK-1）は、調査区の中央北側に位置している。遺構は土壤部（A）と、東側に浅いテラス部（B）とを有する土壤となっている。大きさは東西径0.03m、南北径1.80m、最大深土が0.18mで、N-7°-Eに方位を有し隅丸長方形形状を呈している。

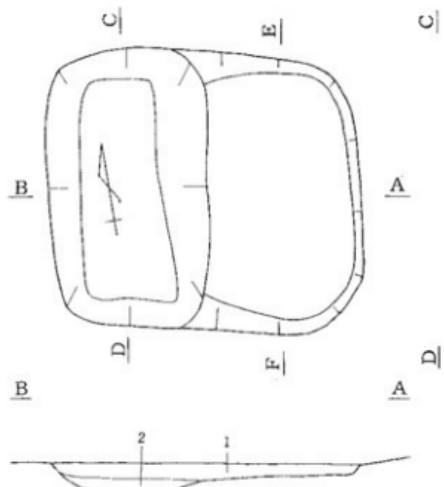
土壤部（A）は東西径1.03m、南北径1.80m、深さ0.18mを計測し、隅丸長方形形状を呈している。底面は皿状を呈しており、壁は斜めに掘り込まれている。テラス部（B）は東西径1.00m、南北径1.77m、深さ0.12mを計測し、長方形形状を呈している。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。

土層は、テラス部（B）から土壤部（A）の上面まで多量の炭化物を含む黒色土が堆積しており、土壤部（A）の黒色土下位には暗褐色土が堆積している。この2層には、焼土や焼土粒子は含まれておらずローム面にも焼けた部分は認められなかった。

出土遺物としては、何ら出土しなかったために具体的な時期を決定することは出来ないが、新しい時期（中世以降）の土壤と推定される。なお黒色土中には、骨片や骨粉は含まれていない。



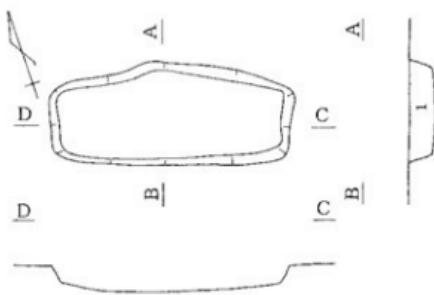
第12図 第9号住居跡実測図



- 【土層凡例】
- 1). 黒色土  
(多量の炭化物を含)
  - 2). 暗褐色土  
(ローム粒子を含)

第1号土壤実測図

{ S ~ 1:40  
L ~ 34.70m }

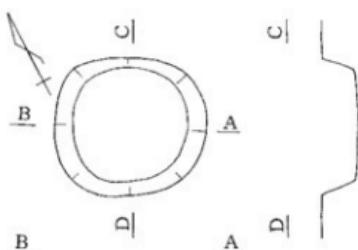


第2号土壤実測図

{ S ~ 1:40  
L ~ 34.50m }

【土層凡例】

- 1). 黒色土 (ロームブロックを含)



第3号土壤実測図

{ S ~ 1:40  
L ~ 34.70m }

【土層凡例】

- 1). 黒色土 (焼土粒子を含)
- 2). 暗褐色土 (ローム粒子を含)

第13図 土 壤 実 測 図

## 第2号土壙

第2号土壙(SK-2)は、SI-1の床面を掘り切った状況で確認された土壙である。大きさは東西径1.55m、南北径0.66m、深さ0.17mでN-73°-Wに方位を有しており不整長方形形状を呈している。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

土層は、ロームブロックを少量含む黒色土が1層堆積しているのみで、出土遺物も皆無であるために具体的な時期を決定することは出来ないが、SI-1の床面を掘り切っていることから古墳時代後半以降の土壙と判断される。なお本跡の掘り込み面は、確認出来なかった。

## 第3号土壙

第3号土壙(SK-3)は、調査区の中央南側でSI-9の東側に位置している。大きさは、東西径0.98m、南北径0.88m、深さ0.23mでN-82°-Wに方位を有し、精円形状を呈している。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

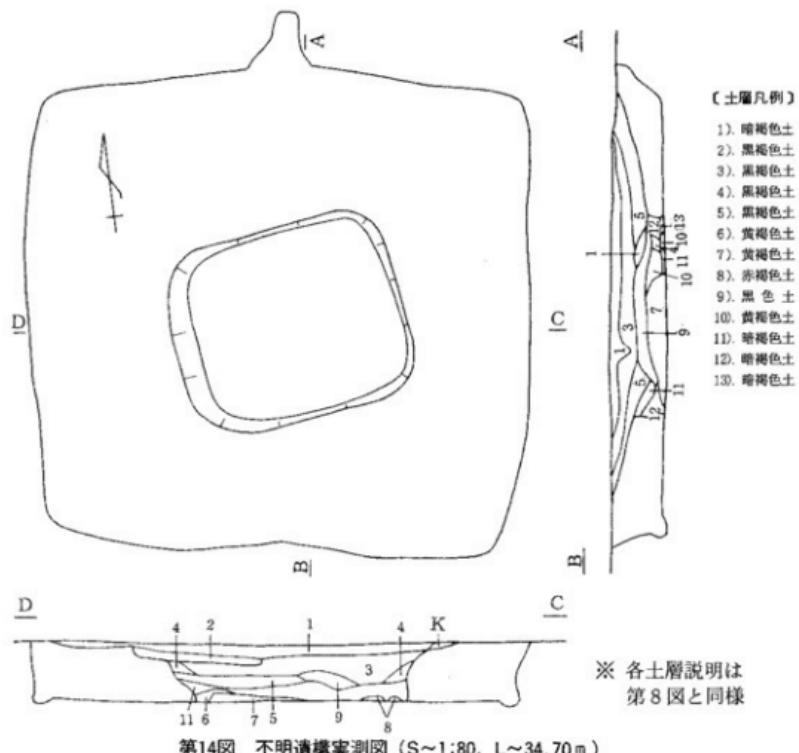
土層は、焼土粒子を含む黒色土(第1層)と、ローム粒子を含む暗褐色土(第2層)の2層が堆積しているものの壁面と底面に焼けた所は認められなかった。また遺物も何ら出土しなかったために具体的な時期を決定することは出来ないが、SI-9の近くに掘り込まれていることからSI-9に結び付く可能性を有する土壙と判断される。

### 3. 不明遺構(第14図、図版4)

ここでいう不明遺構とは、第5号住居跡(SI-5)の中央部でSI-5を掘り切っている遺構である。SI-5も本跡と同様に、覆土上層は耕作による搅乱土層である。このため、遺構確認時で新旧の判断は出来なかった。SI-5の調査中で、同住居跡の土層調査中に発見した遺構である。遺構の大きさは、土層から推定すると東西径2.80m、南北径2.30m、深さ0.80mで長方形形状を呈する遺構と推定される。底面は直床状で、壁は垂直に掘り込まれている。壁溝と柱穴は認められなかった。

土層は黒褐色土(第3・4・5層)、黒色土(第9層)、黄褐色土(第6・7・10層)、暗褐色土(第11・12・13層)、焼土ブロック(第8層)が堆積している。堆積状況は、SI-5と異なった堆積状況を示しているが、自然堆積とは考えにくく人為的に埋められたようである。

出土遺物としては、本跡に結び付く遺物は何ら出土していないため、時期等を決定すること困難ではあるが中世の小堅穴ではなかろうか。他に類似する遺構が無いため、本遺跡の他の地点が調査されれば時期等が判明する可能性を有している。

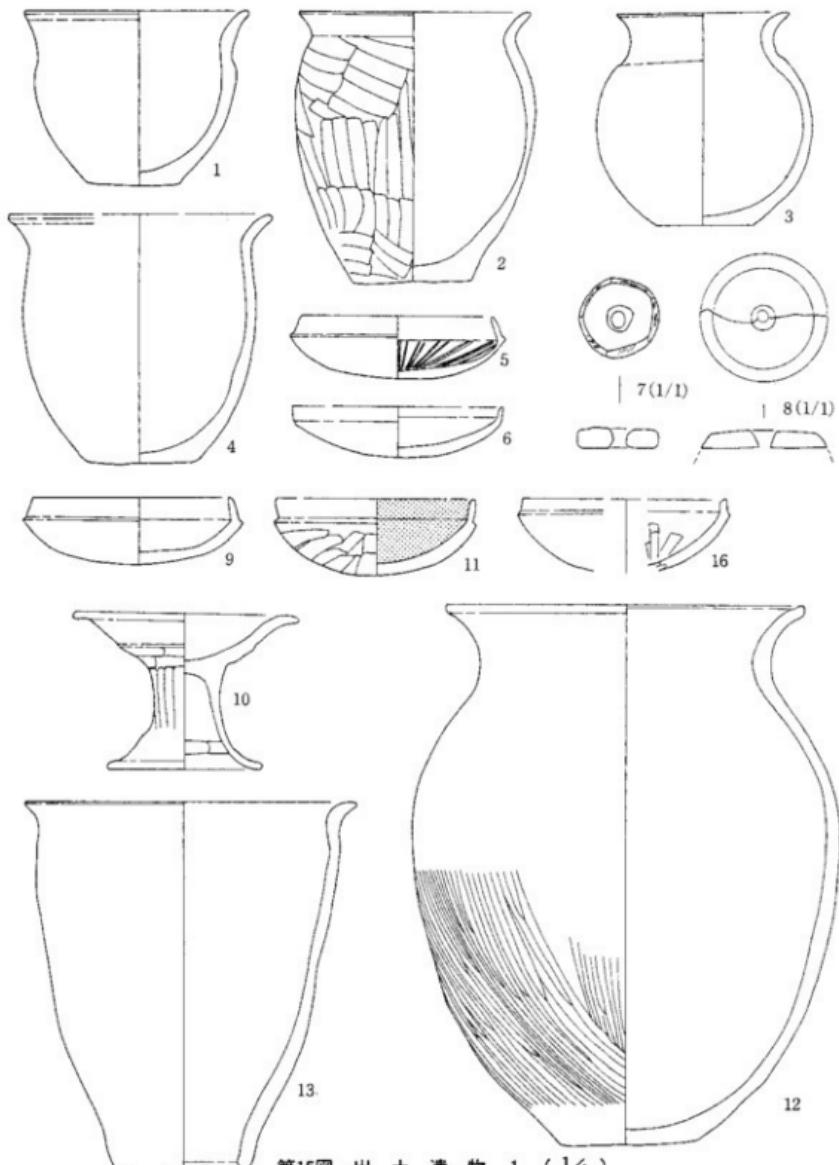


第14図 不明遺構実測図 (S~1:80, L~34,70m)

#### 4. 出土遺物

##### 1). 住居跡内出土遺物 (第15・16・17図、第2・3・4・5表、図版7・8)

ここでは、各住居跡より出土した遺物に関して、各住居跡順に記述する。No 1～8は、第2号住居跡よりの出土遺物で1～4は土師器甌であり、5と6は土師器杯で7は石製模造品であり8は紡錘車である。1は床面より出土している。最大径を口縁部に有し、底部は端部でやや丸味を有している。器面は、全体的に磨滅している。口縁部は、直線的に外傾しているが口唇部はやや外側に開き肥厚化している。2は床面より出土しており、全体的に湾曲した器形となっている。体部の最大径は、体部の上半で15.8cmを計測する。緻密な胎土で、体部下端が横位ヘラ削り後ヘラナデが施こされている以外は、縦位へのヘラ削り後ヘラナデが施こされている。口縁部は、や



第15図 出土遺物 1 (1/4)

第2表 出土遺物一覧表 1

番号	出土遺構	名称	法量				胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	他
			口径	底径	高さ	脚径					
1	第2号住居跡(SI-2)	土師器 甕	14.7	6.2 × 5.8	11.5		長石、石英 雲母を含 緻密	良好	淡赤褐色	口縁部横位のヘラナデ、体部へラナデ、体部内面へラナデ、体部外面磨滅している。	床面より出土 完形
2		上師器 甕	15.1 × 14.7	7.9 × 8.0	18.0 × 17.7		雲母、長石 石英を含 緻密	良好	明茶褐色 一部黒色	口縁部横位のヘラナデ、体部縦位のヘラ削り後へラナデ、内面へラナデ、底面へラナデ	口唇部 湾曲、 完型
3		土師器 甕	推 11.2	6.8 × 6.5	9.0 × 8.8		緻密	良好	赤褐色 一部赤褐色化	口縁部横位へラナデ、 体部内外面へラナデ、 口縁部程度欠損、 体部2次加熱より赤褐色化	床面出 土、い びつ
4		土師器 甕	推 17.3	7.0 × 6.5	16.3		雲母、長石 石英を含 粗	良好	淡黒色	口縁部横位へラナデ、 体部～底部にかけ著しく剥離しているため整形不明、△程度 遺存	接合資 料
5		土師器 甕	12.7 × 12.2		4.2		長石、石英 を含 緻密	良好	淡赤褐色 一部明黑色	口縁部横位へラナデ、 陵へラ削り出し、体部へラ削り後へラナデ、体部内面に放射状の暗文有	床面出 土、稍 円形状
6		土師器 甕	推 13.8		3.3		雲母、長石 石英を含 粗	良好	明茶褐色	口縁部横位へラナデ、 体部外面へラ削り後へラナデ、内面へラナデ、体部内面煤付着	床面出 土、体 部△残
7		石製模 造品 臼玉	径 1.3	孔 0.3	厚 0.2					完形品で滑石製、孔は上下両面より穿たれる。側面に研磨痕を有する。	床面出 土
8		紡錘車	上径 4.1	孔 0.7						△程度の破片、孔は上下両面より穿たれているようである。 覆土内出土	滑石製
9	第3号住居跡(SI-3)	土師器 甕	13.0		4.4		緻密	良好	淡茶褐色 内面黒色	口縁部横位へラナデ、 体部へラ削り後へラナデ、内面黒色処理 口縁～体部下半まで△程度欠損	接合資 料

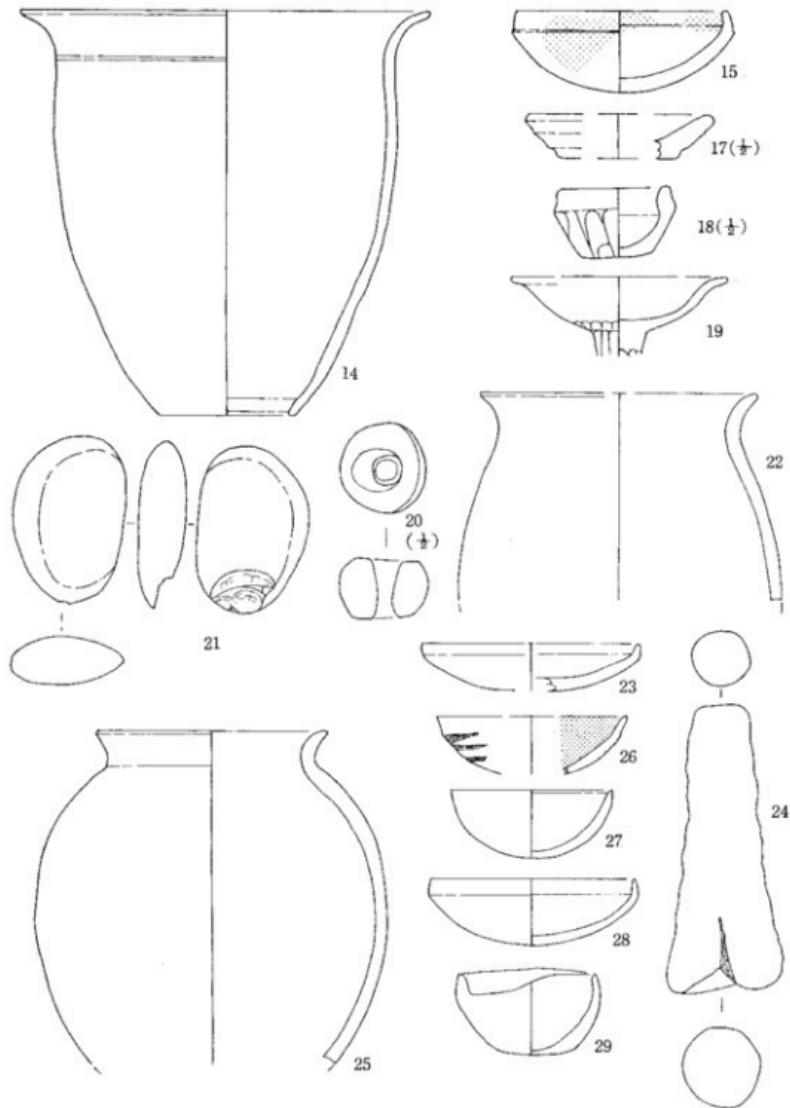
第3表 出土遺物一覧表2

番号	出土遺構	名称	法量 cm				胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	他
			口径	底径	現高	脚深					
10	第3号住居跡(S I-3)	土師器 高杯	14.9 X 14.7		10.3 X 10.0	10.0 X 10.1	長石、石英 雲母を含 緻密	良好	淡茶褐色	杯上半ヘラナデ下半 横位ヘラ削り、脚上 半縦位ヘラ削り下半 ヘラナデ内面ヘラ削 り・ヘラナデ	杯形 欠損 いびつ
11		土師器 杯	推 13.2		5.0		長石、石英 雲母を含 普通	良好	黑色	口縁部横位ヘラナデ、 体部外表面ヘラ削り後 ヘラナデ、内面黒色 処理、口縁一部と体 部少程度残	
12		土師器 甌	23.4 X 22.5	9.0	25.5		雲母、長石 石英を含 粗	良好	暗褐色	口縁～体部中半まで ヘラナデ、体部下半 縦位ヘラナデヘラミ ガキ、内面ヘラナデ、 接合資料	カマド 内出土 一部欠
13		土師器 瓶	21.8	8.5	23.9		長石、石英 雲母を含 普通	良好	淡明褐色	口縁部横位ヘラナデ、 体部縦位ヘラナデ、 内面ナデ、体部下端 内面にヘラ削り、口 ～体部少欠	接合資 料
14		土師器 瓶	28.0	9.6	27.5		雲母、長石 石英を含 緻密	普通	暗褐色	口縁部横位ヘラナデ、 体部外表面ヘラナデヘ ラミガキ、内面ナデ、 体部下端外面上にヘラ 削り	接合資 料、少 程度残
15	第5号住居跡(S I-5)	土師器 杯	14.5 X 14.1		5.5		長石、石英 雲母を含 粗	良好	明黒色	口縁部横位ヘラナデ、 体部内外ヘラナデ、 口縁～体部内外に煤 付着、口～体部にかけ 少程度欠	接合資 料
16		土師器 杯	推 13.4		4.9		長石、石英 を含 緻密	良好	暗褐色 で一部 黒色	口縁部横位ヘラナデ、 体部ヘラ削り後ヘラ ナデ、内面ヘラナデ 少～少程度遺存	接合資 料
17		土師器 杯	推 7.0 X 5.0	推 4.0	1.5		長石、石英 を含 粗	良好	淡黒色	体部内外面ヘラナデ、 底面ヘラ削り後ヘラ ナデ、口縁～底部ま で少程度遺存、小型 の杯である。	床面出 土
18		土師器 杯	4.0 X 3.9	2.5		2.4 X 2.3	長石、石英 雲母を含 粗	良好	淡黒色	口縁部横位ヘラナデ、 体部縦位ヘラ削り後 ヘラナデ、底面ヘラ 削り後ヘラナデ、い びつな器形	完形

や外湾ぎみに外傾している。3は床面より出土した甕で、口縁部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。推定口径は11.2cmで、やや湾曲した器形となっている。体部上半には、整形時のヘラナデによる低い段が削り出されている。体部は半球状で、下端にはヘラ削り後にヘラナデが施こされている。4は床面より出土した土師器甕の接合資料で、口縁部から体部下半まで $\frac{1}{4}$ 程度遺存している。推定口径は17.3cmで、湾曲した口縁部となっている。口縁部から底部まで、内外面ともヘラナデが施こされているものの体部下半から底部にかけて、器面が著しく剥離している。5は床面から出土した坏で、体部下端の一部を欠損している。楕円形状を呈する器形のため、口縁部も湾曲している。稜は短く削り出され、先端は丸く整形されている。稜径は、 $14.1 \times 13.4$ cmを計測する。体部内面には、放射状の暗文が見られる。6は床面より出土した坏で、楕円形状の器形となっている。体部を $\frac{1}{2}$ 程度と、口縁部の一部を遺存する程度である。口縁部は直立しており、粗い胎土で体部内面には煤が一部付着していることから灯明皿に使用されたようである。7は床面より出土した石製模造品で、白玉の完形品である。側面に研磨痕を有しており、上下より孔を穿たれている。8は覆土の第2層より出土した滑石製紡錘車であるが、下半を欠損していることから $\frac{1}{2}$ 程度の遺存率である。

Nº 9～13までは、第3号住居跡よりの出土遺物である。Nº 9、11は土師器坏であり、Nº 10は土師器高坏、Nº 12は土師器甕で、Nº 13、14は瓶である。9は床面上18.0～30.0cmの所より出土した接合資料で、口縁部から体部下半まで $\frac{1}{3}$ 程度を欠損している。緻密な胎土で、稜は短く削り出され先端は丸く整形され、稜径14.4cmを計測する。10は床面上24.0cmの所よりの出土で、坏部を $\frac{1}{5}$ 程度欠損している。坏部口縁はやや湾曲しており、器高も低く湾曲した器形となっている。脚部先端は、短く整形されている。11は床面上20.0cmの所より出土している。全体的に半球状を呈する器形で、体部上半には稜を鋭く削り出している。稜径は、13.3cmを計測する。12はカマド内燃焼部上面より出土し、破片での接合資料であるため体部の一部を欠損している。粗い胎土で、口縁部がやや湾曲している。体部の最大径を中位に有し、径24.2cmを計測する。13と14は接合資料である。13は床面上20.0cmの所より破片で出土し、口縁部から体部下半まで $\frac{1}{3}$ 程度を欠損している。体部は直線的に外傾しており、頸部は肥厚である。体部下端は内面にヘラ削りが施こされている。14は床面より21.0cmの所より破片で出土し、口縁部から体部下端まで $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は中央下半まで外傾しているが、中央から頸部までは直立ぎみに立ち上がっている。13と14は同じ瓶であるが、異なったスタイルの瓶である。

Nº 15～25は、第5号住居跡よりの出土遺物である。Nº 15・16・23は土師器坏で、Nº 17・18は小型坏である。Nº 19は土師器高坏であり、Nº 20は土玉で21は礫石である。Nº 22・25は土師器甕であり、Nº 24は土製支脚である。15は床面上9～15cmの所より出土した接合資料で、口縁部から体部にかけて $\frac{1}{4}$ 程度欠損している。半球状をなす体部で、低い稜を削り出して稜



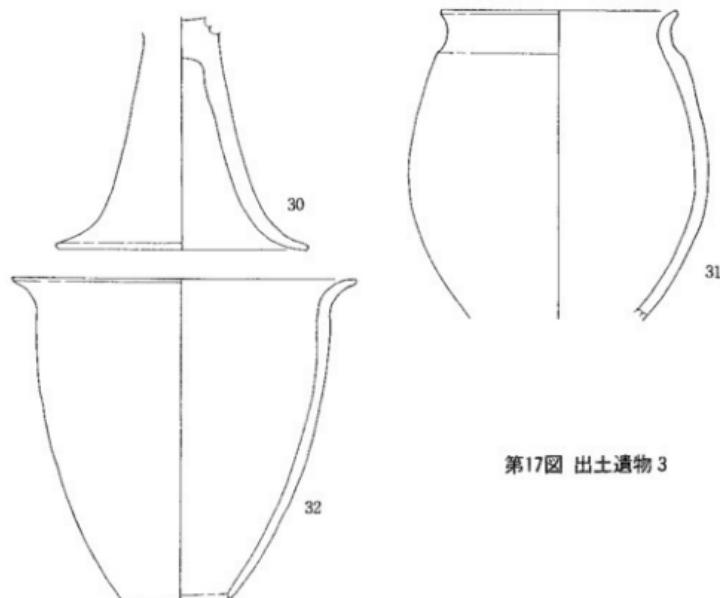
第16図 出土遺物 2 (1/40)

第4表 出土遺物一覧表 3

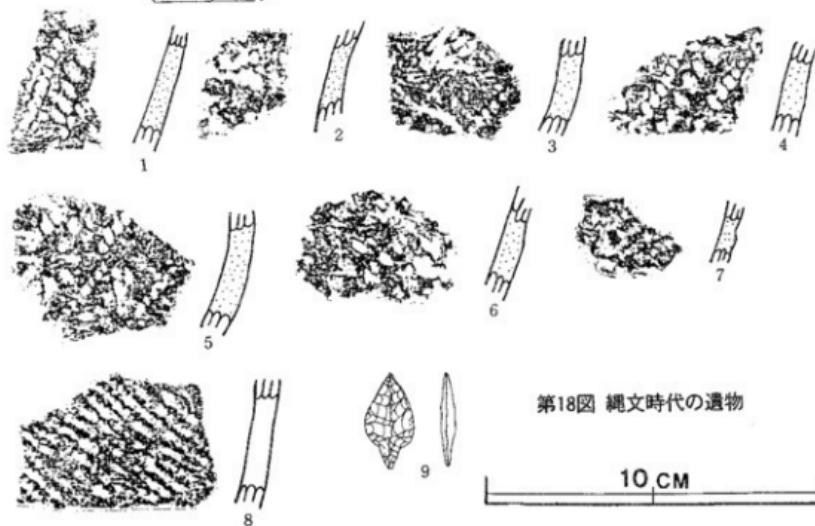
番号	出土遺構	名称	法量cm				胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	他
			口径	底径	現高	脚径					
19	第5号住居跡(SI-5)	土師器 高杯	推 14.8		5.4		長石、石英 を含 普通	良好	明黒色	坏内外面へラナデ下 端縁位へラ削り 脚部縁位のへラ削り 杯部1/4程度遺存	
20		土玉	径 3.1 × 2.9	孔径 1.0	1.0		長石、石英 雲母を含 普通	普通	暗褐色		完形
21		蔽石	径 11.3 × 7.7		厚 3.3					片側の先端に使用痕 を有す 上下両面と側面は自 然面 完形、硬質砂岩	
22		土師器 甕	推 18.0		14.0		長石、雲母 石英を含 粗	良好	暗茶褐色	口縁部横位へラナデ、 体部へラナデ、内面 ナデ、内外面剥離し ている。1/4程度遺存 接合資料	カマド 内出土
23		土師器 坏	推 15.0		3.2		繊密	良好	暗褐色	口縁部内外横位へラ ナデ、体部内外面へ ラナデ、体部下端平 底化、1/4～1/2程度の 破片	
24		土製 支脚	上径 3.5	下径 7.7	19.5		粗	良好	暗赤褐色	カマド内出土 完形品、上面と側面 ナデ	
25		土師器 甕	16.0		21.6		長石、石英 雲母を含 粗	良好	赤褐色	口縁部横位へラナデ、 体部内外面へラナデ、 体部外面中半まで磨 減下半以下剥離、接 合資料	カマド 内出土
26	第6号住居跡(SI-6)	土師器 坏	推 13.0 × 12.5		3.9		繊密	良好	暗褐色 内面黒色	体部上半横位へラナ デ下半へラ削り後へ ラナデ、内面へラミ ガキ、黒色処理、口 縁部鴻曲	
27		土師器 坏	11.0		4.6		繊密	良好	明黒色	体部外面へラ削り後 へラナデ、口唇部内 面へラ削りへラナデ、 体部内面へラナデへ ラミガキ、1/2欠	

径は $15.2 \times 14.8\text{cm}$ を計測する。器形はややいびつな器形で、口縁部内面と口縁部外面から体部外面上半まで煤が付着しているため、灯明皿として使用されたようである。16は床面上 $6 \sim 8\text{cm}$ の所より出土した接合資料で、口縁部から体部下半まで $\frac{1}{3} \sim \frac{1}{4}$ 程度遺存している。体部は半球状を呈し、稜は低く削り出され先端は鋭くなっている。推定径は、 $13.1\text{cm}$ である。緻密な胎土で、体部内面には線位のヘラ整形痕を有している。17は床面より出土しており、口縁部から底部まで $\frac{1}{4}$ 程度の破片である。口縁部はやや湾曲し、肥厚な器内で粗い胎土と粗い整形である。18は床面上 $6\text{cm}$ の所より出土した完形品で、全体的にいびつな器形で粗い胎土と整形である。17の近くから出土していることから、セットの可能性を有している。19は床面上 $12\text{cm}$ の所より出土しており、脚部下半を欠損し坏部も $\frac{1}{4}$ 程度遺存している。20は床面上 $4\text{cm}$ の所より出土した完形品である。土玉としては、この1点が出土したのみである。21は床面上 $10\text{cm}$ の所より出土しており、一方の先端に使用痕を有している。22～25は、カマド内よりの出土品で土製支脚(24)の周囲より出土している。22は、口縁部から体部中半まで $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。粗い胎土で、体部の内外面とも剥離している。23は、口縁部から体部下端まで $\frac{1}{3} \sim \frac{1}{4}$ 程度遺存している。緻密な胎土で、体部下端は平底化しており口縁部は直立している。体部内外は、剥離している。24は完形品で、土製支脚としては唯一の遺物である。25は接合資料で、体部を $\frac{1}{3}$ と底部を欠損している。粗い胎土で、球形を呈する体部で体部の中央に最大径( $23.3\text{cm}$ )を有している。体部外面は磨滅しており、体部内面も中央以下は著しく剥離している。

N<sup>o</sup>26～32は、第6号住居跡よりの出土遺物である。N<sup>o</sup>26～28は土師器坏で、N<sup>o</sup>29は土師器塊である。N<sup>o</sup>30は土師器高坏であり、N<sup>o</sup>31は甕で32は瓶である。26は床面上 $6.0\text{cm}$ より出土し、 $\frac{1}{3}$ 程度の破片である。口縁部が湾曲し、内面は黒色処理が施されている。体部外面にはヘラ状工具による整形痕が傷状に残っている。27は床面上 $13.0\text{cm}$ の所より出土し、口縁部から体部下端にかけて $\frac{1}{3}$ 程度を欠損している。半球状を呈する器形で、体部下端はやや平底化している。緻密な胎土で、口縁部内面にはヘラ削り後ヘラナデが施されている。28は床面上 $9.0\text{cm}$ の所より出土し、口縁部を一部欠損しているがほぼ完形品である。緻密な胎土で、体部は半球状を呈し口縁部は直立している。29は床面上 $9.0\text{cm}$ の所より出土し、完形品であるが著しく湾曲した器形となっている。緻密な胎土で、半球状を呈する器形であるが、口縁部は著しく湾曲している。30は床面上 $22.0\text{cm}$ の所より出土し、 $\frac{1}{3}$ 程度が遺存している。緻密な胎土であり、現存高から大型の高坏であったことと判断される。31は床面上 $19.0\text{cm}$ の所より出土し、体部下半以下を欠損している。口縁部は短く外傾しており、湾曲した口縁部となっている。32はカマド内より出土し、完形品であるがひび割れした状態で出土している。全体的に橢円形を呈する器形であり、口縁部も湾曲している。



第17図 出土遺物 3



第18図 縄文時代の遺物

第5表 出土遺物一覧表4

番号	出土遺構	名称	法量 cm			胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	他	
			口径	底径	高さ						
28	第6号住居跡 (S I - 6)	土師器 杯	14.0		4.5	織母、長石 石英を含 織密	良好	暗褐色	口縁部横位へラナデ、 体部外側へラ削り後 へラナデ内面へラナ デ、口縁部一部欠損 完形		
29		土師器 塊	9.3		5.5 × 6.0	織密	良好	暗褐色	内外面とも荒いへラ ナデ、湾曲する口縁 部で、全体的に湾曲 完形		
30		土師器 高杯			16.3	18.0	織密	良好	暗褐色	脚上半腰減で整形不 明下端へラナデ、内 面へラナデ、1/4程度 遺存している。	
31		土師器 甕	16.9 × 16.0		21.9	織母、長石 石英を含 織通	良好	明褐色	口縁部横位へラナデ、 体部外側横位へラ削 り後へラナデ内面ナ デ、口縁部湾曲	接合部 料	
32		土師器 甕	24.5 × 23.8	7.7 × 7.3	22.9 × 22.7	長石、石英 を含 織密	良好	暗褐色	口縁部横位へラナデ、 体部外側横位へラナ デ、内面へラナデ、底 面内側へラ削り、 構円形を呈	完形	

## 2). その他の出土遺物

## 第2号住居跡 (S I - 2) 出土貝 (図版8)

第2号住居跡から出土した貝は、カマドの燃焼部上面より出土し全て火力を受けている。出土した貝は、斧足網の二枚貝である。カマド内からの出土例は、あまり例がなくカマド壁補強剤として使用されたものか食用品であるかは確定し得ない。

## 縄文時代の遺物 (第18図、図版8)

今回の調査で出土した縄文時代の遺物は、縄文式土器8点と石鎌1点の9点である。土器はすべて小破片であり、明確に遺構を伴うものではなく住居跡の覆土中より出土している。出土した土器は、胎土中に織維を含む土器群 (第1群) と織維を含まない土器群 (第2群) の2群に分けることができる。

## 第1群土器 (第18図1~7)

これらの土器群は胎土中に織維を含む土器群で、器外面に縄文が施され、器内面は丁寧な横位の籠磨きが見られる。前期前半の土器に位置付けられる。

1は深鉢形土器の口縁部に近い部分と考えられ、節の太さの異なる条を燃り合わせたもので、LRの縄文が押圧されている。出土位置はS I - 2の覆土中である。

2~6はS I - 5の覆土中からの出土であり、接合できないものの同一個体の可能性が認められる。また、前述した1も同一個体と考えられる。2は深鉢形土器片で、胴上部の部分と考えら

れるが、器壁外面の一部が剥落しているため縄文は不鮮明であるが、上部にLRの縄文が認められる。3の器面も不鮮明であるが、部分的に斜格子状の縄文構成が認められ、同一原体の方向を変えて回転施文したと考える。やはり、深鉢形土器の胴部片で、中段ほどの部位であろう。4は前述の1ときわめて類似した縄文を有する胴部片で、条の太さが異なっている。5はやや内彎した器壁を有し、3と同様の斜格子状の縄文が認められる。6も不鮮明ながら3・5などと同様の文様を有している。これらの土器群は、外面に対して内面はきわめて丁寧な箠磨きが施されている。

7は小破片であるが、LRの縄文が施文されており、SI-6の覆土中からの出土で、器厚は5mmと薄く、内面は横方向の箠削りが施されている。

#### 第2土器群（第18図8）

縦維を含まない土器で、1点だけであるが中期の土器と考えられる。8はRLの縄文が器面全体に認められ、内面は横方向の箠削りがなされている。色調は暗褐色を呈し、器面は内外とも磨かれている。

#### 石 畏（第18図9）

全長2.9cm、器厚4mmほどの有茎石鎧である。石質はチャート製で、調査区北西部より出土しているが、遺構は伴なっていない。

## 結 び

十三仏遺跡は、北方に向かって突出する台地一帯が遺跡であり、今回はその北側の一部を調査したのみである。調査の結果に関しては、今まで記述して来たとうりである。発見された遺構は、古墳時代から平安時代までの住居跡と古墳時代後半以降の土壤と堅穴で、遺構の中心は古墳時代後半～奈良時代にかけての住居跡である。

古墳時代後半～奈良時代にかけての住居跡は、第1号～3号住居跡（SI-1～3）と第5号7号住居跡（SI-5・7）の5軒であるが、SI-7は東側半分が調査区外に所在している。

この5軒の住居跡は、1辺が5m代の住居跡で北壁にカマドを有しているが、SI-1は東壁にカマドを有している。平面プランとしては、方形又は隅丸長方形状を呈している。柱穴は4～6本掘り込まれており、床面はしっかりした床面となっている。カマドには、砂質粘土が使用されているものの量的には少量で、砂質の暗褐色土が多く用いられている。このためであろうか、壁の補強材として土師器壺等が多く使用されている。SI-2、3、5では、著しく使用されている。またSI-5のカマドでは、土製支脚の周囲から多量の土師器が出土しており、SI-2のカマド内からは貝が出土している。この貝は、カマド燃焼部壁より出土していることから補強材として使用されたものと推定される。茨城県内でも、このような出土例はあまり知られていない。

出土遺物としては、土師器が全部で須恵器は破片ですら1点も出土しておらず、遺物の中心は土師器である。S I-5より臼玉が1点、小型壺が2点出土している点は注目される。小型壺は、他の住居跡より出土しておらず日用品以外の使用目的を有する壺と推定され、臼玉とセットである可能性を有している。また土師器壺は、稜が低くなり底面が平底化している壺が出土している。

今回の調査で発見・調査した住居跡に共通する点としては、住居跡の床面上に厚く黄褐色土が堆積している点である。この黄褐色土は、ロームブロックとローム粒子が主体の土層で、いわゆる捨てロームであることから、各住居跡は廃棄後まもなく人為的に埋められてから自然堆積により埋設したことと推定される。カマドの状況と合せると、本遺跡の性格を示すことといえよう。

不明遺構（S X-1）は、S I-5の中央部を掘り切っている遺構で、上面は住居跡覆土上層と合せ耕作攪乱を受けているため土層で確認された遺構である。床面は、S I-5の底面よりやや低く直床状を呈している。プランとしては、方形状を呈している。遺構に結び付く遺物も出土しなかったため、具体的な時期を決定することは不可能であるものの中世の小堅穴と推定される。

今回の調査は、今まで述べて来たように限られた範囲での調査であり、住居跡等は調査区の東側と西側に広がっていることから、遺跡全体の調査結果を待たねば遺跡の性格等を明らかにすること出来ない。しかし、今回の調査結果を見るならば、各住居跡とも土層の堆積状況やカマドの構造がほぼ同様の状況を示していることから、住居跡は廃棄後まもなく人為的に埋められていることから、集団で移動したことと示しているのではなかろうか。

各住居跡の時期としては、S I-1、3、5、7の5軒が古墳時代後半～奈良時代前半頃まで7C後半～8C初頭頃に位置付けられるようである。S I-6は、奈良時代の住居跡であるが前期の様相を残していることから8世紀前半頃に位置付けられよう。S I-4は、平安期の住居跡で9C期以降であろうし、S I-8は、古墳時代に位置するようであるが具体的な時期決定は出来ない。これは、S I-9も同様である。古墳時代以降の住居跡には、須恵器を1点も伴っていない点に本集落の特徴があるといえよう。

## 参考文献

- 「二本木城跡調査報告書」 平成3年3月 麻生町二本木城跡調査会
- 「於下貝塚発掘調査報告書」 1992年 麻生町教育委員会
- 「東町史」資料編・原始考古 平成10年3月 東町史編纂委員会
- 「一本木遺跡調査報告書」 平成9年3月 八千代町教育委員会
- 「小屋ノ内館跡・大麻古墳群調査報告書」 1997年12月 麻生町遺跡発掘調査会
- 「四部切遺跡発掘調査報告書」 1997年12月 麻生町教育委員会

図版1 遺跡現況



遺跡中央より北側（ハウス部分調査区）



中央部より南側

図版2 遺構全景

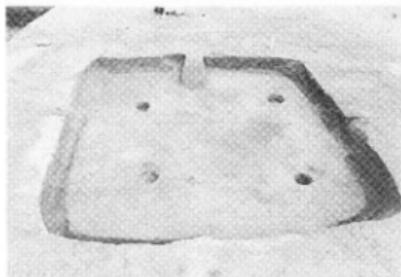


遺跡中央より北側



中央部より南側

図版3 遺構1住居跡（第1号・2号住居跡）



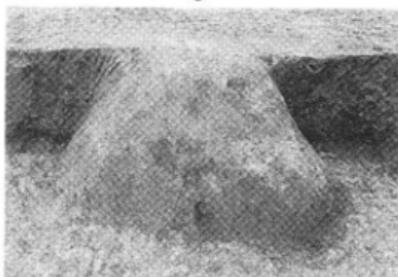
1



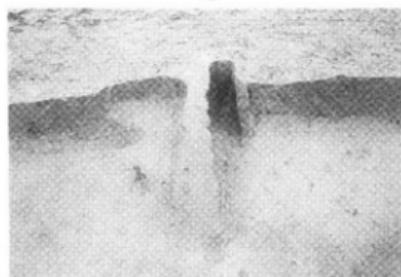
5



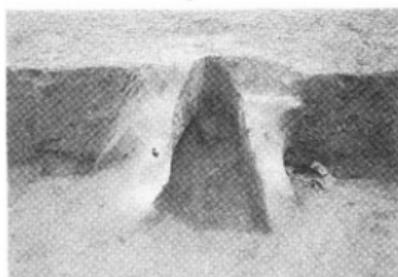
2



6



3



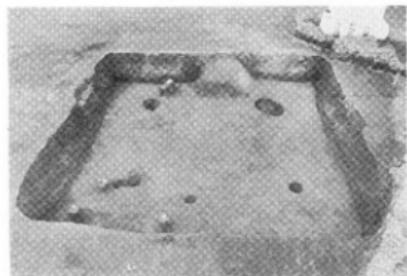
7



4

- |   |                          |
|---|--------------------------|
| 1 | 第1号住居跡(S I-1)遺構全景        |
| 2 | 第1号住居跡(S I-1)カマド全景(調査前)  |
| 3 | 第1号住居跡(S I-1)カマド全景(調査後)  |
| 4 | 第2号住居跡(S I-2)・SX-1土器全景   |
| 5 | 第2号住居跡(S I-2)遺構・遺物出土状況全景 |
| 6 | 第2号住居跡(S I-2)カマド全景(調査前)  |
| 7 | 第2号住居跡(S I-2)カマド全景(調査後)  |

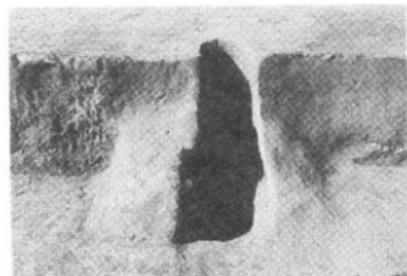
図版4 遺構2住居跡（第3号・4号・5号住居跡）



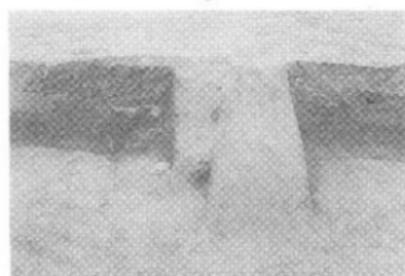
1



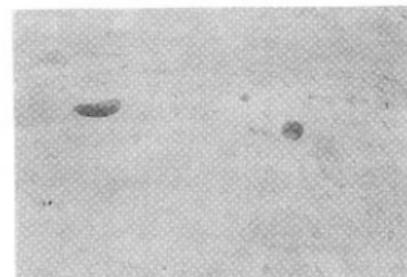
5



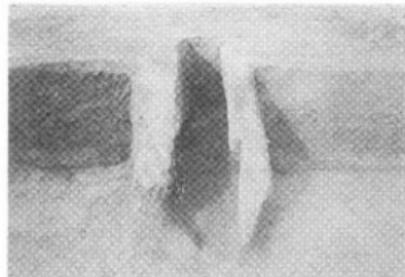
2



6



3



7



4

1	第3号住居跡(S I-3)遺構・遺物出土状況全景
2	第3号住居跡(S I-3)カマド全景(調査後)
3	第4号住居跡(S I-4)遺構全景
4	第5号住居跡(S I-5)・SX-1 土層全景
5	第5号住居跡(S I-5)遺構・遺物出土状況全景
6	第5号住居跡(S I-5)カマド全景(調査前)
7	第5号住居跡(S I-5)カマド全景(調査後)

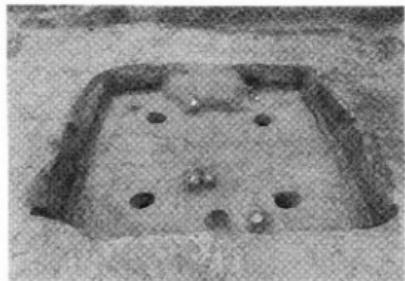
図版5 遺構3住居跡（第6号～9号住居跡）



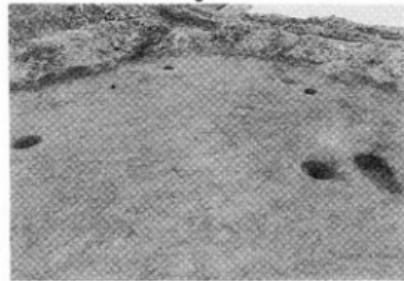
1



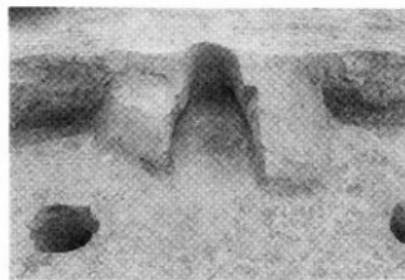
5



2



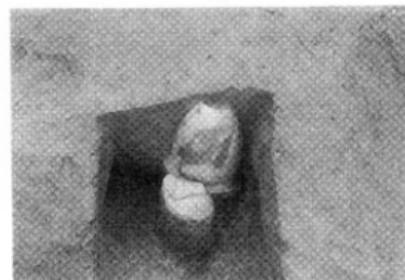
6



3



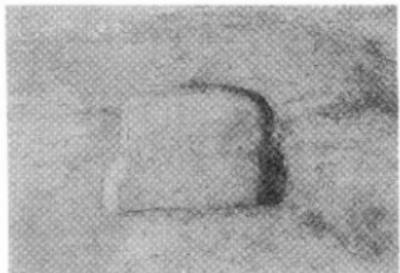
7



4

1	第6号住居跡(SI-6)土層全景
2	第6号住居跡(SI-6)遺構・遺物出土状況全景
3	第6号住居跡(SI-6)カマド全景(調査後)
4	第6号住居跡(SI-6)カマド内遺物出土状況
5	第7号住居跡(SI-7)遺構全景
6	第8号住居跡(SI-8)遺構全景
7	第9号住居跡(SI-9)遺構全景

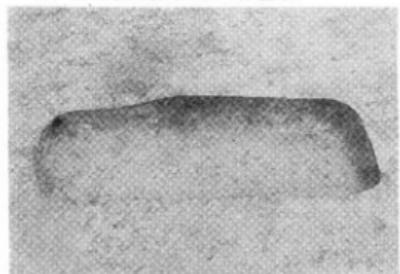
図版6 遺構4土壤(第1号~3号土壤)・遺物出土状況



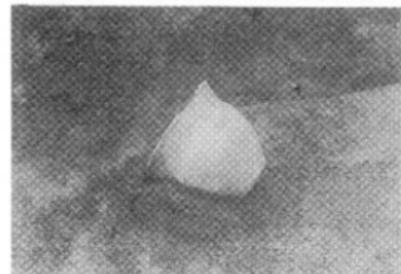
1. 第1号土壤(SK-1)全景



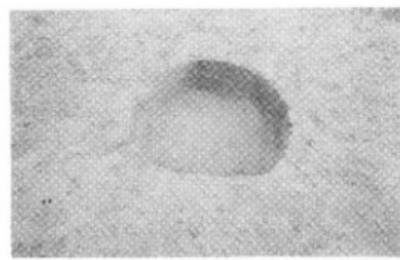
5. 第5号住居跡(SI-5)カマド内遺物出土状況



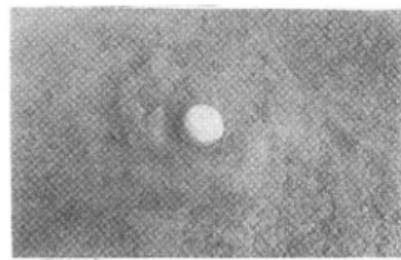
2. 第2号土壤(SK-2)全景



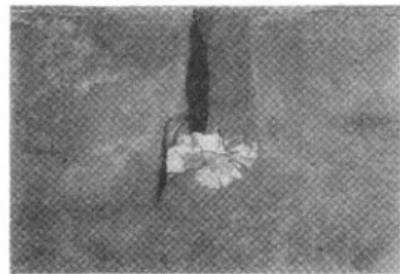
6. No.1(第1号住居跡)出土状況



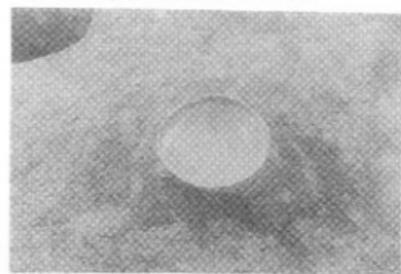
3. 第3号土壤(SK-3)全景



7. No.17(第5号住居跡)出土状況

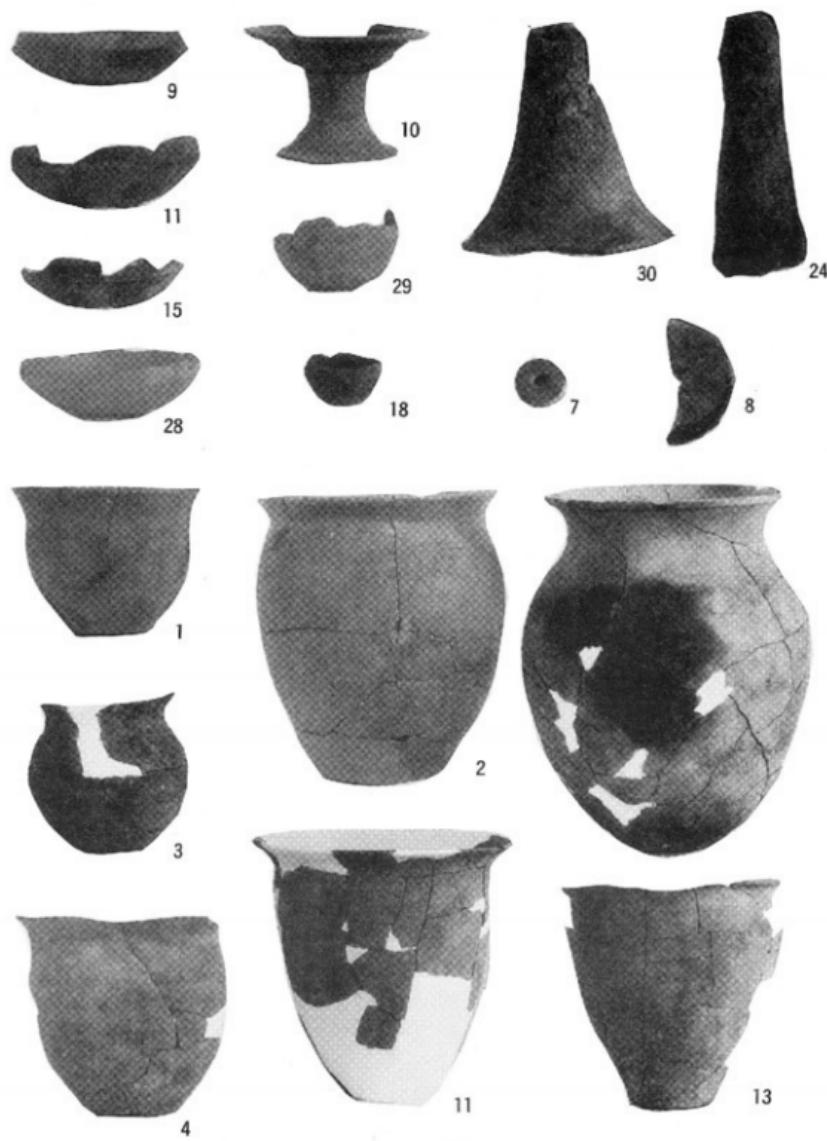


4. 第3号住居跡(SI-3)カマド内遺物出土状況

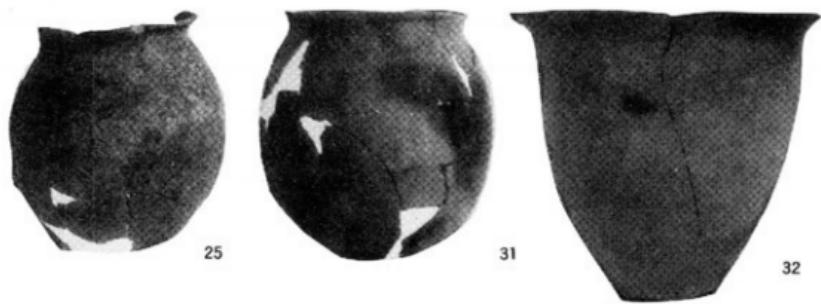


8. No.28(第6号住居跡)出土状況

図版7 出土遺物 1



図版8 出土遺物2

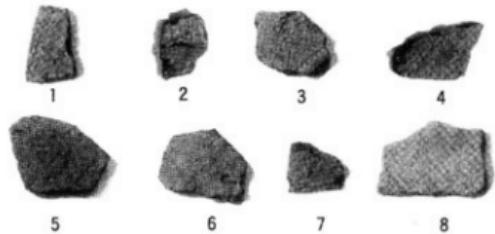


31

32



第2号住居跡（S I - 2）  
カマド内出土具



調査区内出土  
縄文式土器



調査区内出土石鏃

# 十三仏遺跡

## 第1次 調査報告

1999年3月

編集 常総考古学研究所  
佐倉市大蛇町497-6

発行 十三仏遺跡調査会  
麻生町教育委員会  
麻生町麻生1561-9

印刷 久保田印刷  
麻生町四鹿963-20